

---

# 押し入れの異世界

コスモス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

押し入れの異世界

### 【Nコード】

N3792Y

### 【作者名】

コスモス

### 【あらすじ】

大掃除中に自らの黒歴史を封印した押し入れを開けてしまった主人公。

それは、開けてはならないパンドラの箱だったのか？

無職のおっさん予備軍であるところの主人公が神様からもらったお仕事とは何なのか？

まじめでエッチな主人公が、異世界チートで活躍するおはなし。

## 1 プロローグを含むようです。

### プロローグ

大晦日・・・のイブイブ。

せめて散らかり放題の部屋を大掃除しようと思い立った。いや、思い立ってしまった。

実家の2階が私の警備担当区域。そう、私が世に名高い「自宅警備員」だ。

33歳にもなつて・・・orz

「自宅警備員」それは、高校や大学を卒業後、女子が実際には家の手伝いなんか全くしていないにも関わらず、免罪符のように名乗る立派な職業であるところの「家事手伝い」の男子バージョン。

まあ、私の場合は、10年程は就職してはいたんだけどね。

何はともあれ、だれが考えたのか知らないけど、乾いた拍手を送ろうと思う。

さて、小学生時代から使っている机の上に、パソコンとCDラジカセ（懐かしいなあ）各種のテキスト。その横のパソコンラックの上にプリンター、真ん中に液晶テレビ、下にDVDレコーダー。

その他には、ベッドに洋服ダンスに本棚。そうそう、エアコンを忘れてはいけない。私はエアコンが無いと、特に夏は生きていけないので。

でも、今年の夏、冷房を掛けると、ときどき盛大に『シュゴオオオ・・・ピルピルピル』なんて異音を響かせて、結構な量の水が滴り落ちてくるようになったので、今年から室内にはバケツがデフォルト。

悩みは、この異常音の発生のタイミングが、全く予想が付かないこ

とで・・・

深夜に唐突にやられてみな？死ぬほどビビルよ？

寝入りばなだったときなんか、ビクッ！ときて間違いなく3秒程心停止したね。

あの感じを、ホラー映画とかで再現できたら間違いなく大ヒットだと思う。

それはさておき、掃除だ。

窓を開け（何日ぶりだ？）、一通り叩きを掛けてから掃除機をぶんまわし、最後に濡れ雑巾で拭きあげると、『いらないなあ・・・もう・・・』と思われた本や雑誌や年代落ちの参考書といった資源ごみを紐で縛った。

関係ないけど。こういう時、いつも思うのだが、SMの縛る方の人ってホントに上手だね？私は微Sなので、縛られたいとも、縛りたいとも思わないが、あくまで、技術として尊敬してます。

最後に、大掃除の一大イベント『昔のマンガを読みふける』もちやんとやりました。

そして、ふと、きれいな部屋を見渡して、就職した時に封印した押し入れに目が行く。

押し入れといっても、襖ではなく、扉形式の押し入れで1メートル四方のスペースがあり、上下に仕切られている。

中学の頃、上段を空けて座布団とアイロン台と電気スタンドを持ち込んで、内側から扉を閉めて受験勉強をしたのは良い思い出だ。なんか、めちゃくちゃ落ち着くんだ。

しかし、その後は、その隠れ家的な思い出のスペースも、いやだからこそか？高校、大学という7年間の暗黒歴史の産物が詰め込まれた結果、就職時に封印せざるをえないこととなったわけだ。

えっと・・・要するに。ゴミ収集のおじさんだったり、おにいさん

だつたりにさえ、見られるのが恥ずかしい物「とか」も、大量にあったわけだな。

でも、もうそろそろ、警備担当者としては『片付けたい!』と、思ってしまった。

ちなみに、封印の方法として、取手を取り外しておいたので、本当に10年近く一度も開けてない。

中身についても『忘れてしまいたい』という天使と『もう一回くらい見てもいいんじゃない?』という悪魔の戦い?が続いていた結果、具体的に何を入れたかは覚えていない。

一大決心の末、という程ではないけれど、ちょっとした工具を持ち出して・・・ゴソゴソとやること1時間。

開きません。うんともすんとも。どんなに工具を引っかけて引っばしても。

そろそろ、疲れました。自宅警備員に体力を求めてはいけない。ということ、押してみた。

「バコン!ズズズズzzzz・・・」という微妙に重々しい音とともに、あっさり開いたわけだが、えっと・・・私の記憶が確かでなくても、このタイプの押し入れは外開きのハズ、内開きにしたら、せつかくの収納スペースが殆ど失われる。

壊れたか???

それでも、ようやく開いたのだからと、妙な義務感に後押しされ、結構、力任せに押しました。

で・・・

「ここはどこだ!??」

「うちの押し入れですけど」

問われたので即答したよ？

10年程とはいえ、社会の荒波に揉まれた私は、いくつかの貴重な教訓を得ていたわけで、その中に『殺気立つ「美女」には、決して逆らってはいけない』というものがありましたからね。

「・・・何をいつてる？さっきまで『深奥の迷宮』最下層域にいたはず！」

「・・・誠に恐縮ですが、本当「は」存じ上げません。ここはどこでしょう？」

「ふざけるなッ！他の仲間はどこだ！？」

冷や汗が伝う、様な気がした。

咄嗟に、『うちの押し入れ』などと答えてしまったが、見渡す限りにおいて、周りはいわゆる石室。

対応ヲ間違エタデシヨーカ？

慌てて振り向けば・・・おお！石材に訳のわからないレリーフがあり、そこにポツカリと私の部屋が普通に見える。良かった。

とても奇妙なことに、押し入れの木製の扉の内側が、見るからに堅そうな石材の扉になっていた。『よくもまあ、蝶番が重量に耐えられるなあ』と、妙に感心していると。

「無視しないでもらおう！」

「あ、いえ。無視しているわけではなくてですね。私にも状況が分からないもので」

誰にでも経験のあることだとは思うが、一方が異常に興奮すると、他方は逆に冷静になっていくもので、私の場合は以前の仕事の経験で、特にその傾向が顕著なのだ。

でも、5メートル程先で、西洋の長剣？を構えて肩を上下させ、こちらを睨みつける30前後の美女の目が、明らかに『殺る気、満々』となれば、ちょっとだけ、言うてはならないセリフが脳裏をよぎりましたよ？

つまり、『話せばわかる！』と。

これって、死亡フラグでつか？

脳裏をよぎっただけだからセーフ？

でも、黒猫はよぎっただけでもアウトだったか？

## 1 プロローグを含むようです。(後書き)

初心者が適当に、好きなように書いてます。  
不愉快に思った方、ごめんなさい。



## 2 「話せば分かる」は死亡フラグではなかったようです。

いろいろあった訳だが、私が武器を所持していないことを示して、どうにか剣を下してくれた美人さん。安心した途端に倒れるように座り込んでしまった。

なんでも、丸1日この石室に閉じ込められて、何も食べていなかったそう。

慌てて、一旦、自室に戻り、警備区域外の冷蔵庫からスポーツ飲料と、菓子パン2個を持って石室に戻った。

貪るように菓子パンに齧りつき、ドリンクを飲み。一息付けたのは3分後？ええ、3分で2リットルのドリンクと菓子パン（ソーセージ入りとクリームパン）を平らげましたよ。

私の深夜警備のための夜食が・・・もうそろそろ警備員云々のネタはいいか？

「たすかった、礼をいう。私の名はスン。冒険者をしている」

「御丁寧に。私は俊といいます。村上俊。自宅警び・・・ゲフンゲフン。失礼。自宅で仕事をしております。まあ、自営業ですね。よろしくおねがいいたします。」

ぱつと見て美人さんだが、この方、よく見ると「すごい美人さん」だった。

残念なことに多少薄汚れているし、金色の髪もボサボサになってしまっているが、透きとおるような白い肌に宝石のようなブルーの瞳、無粋なことにフルアーマー？の西洋甲冑に身を包んでいるため、スタイルは分かん。 （でも東洋人のような・・・ハーフか？）

でも、身長が私より高く175センチ位で、全体的に細身。フム、期待できそう。

という分けて、当面の行動として、スンさんにお風呂をお勧めした。異世界人？にお風呂を勧めるのっておかしいか？どんな美人さんでも、うんこするし、汗臭くもなる。アイドルは「うんこしない」なんて幻想は、随分前に、すんごい右手を持つ男子高校生に、ぶち壊される以前に自壊した。

スンさんは、私の部屋に来てからあちこち引つかき回し、窓から見える町並みに驚き、通りを走る車に剣を向け「ここにも魔獣が！」とか、つまりはビビリまくっていたが、危険は無いと認識したのか、漸く、お風呂場に連れ込むことに成功した。

甲冑は私の部屋で脱いでもらい、ファ リーズをシュッシュッしておいた。

彼女のオツパイ？頭から被るタイプのシャツ？の下に、サラシの様なものを巻いているらしくて、サイズは未だに不明だ。誠に遺憾だ。

自宅の一階にある風呂場に連れ込み、シャワーとシャンプーとボディーソープの使い方を教え、脱いだ服は全て（ここ最重要。テストに出ます）籠にいれるように指示し、出てきた時は、取り敢えず、私が昔使っていた夏用パジャマ（ここも重要）に着替えるように伝えた。

この時点で、蛇口からお湯がでることや浴室のライト、浴室の手前にある洗面所の鏡を見て大騒ぎしていた彼女には、私の黒い策謀を看破することなどできず、言われるがままに頷いた。

そして30分後・・・お待たせした。

万民に鬼畜外道と罵られようと発表する。彼女のバストは目測でEカップ以上だ。

歳は30歳前後だと思うが、全く垂れる気配さえなく、ブラジャー

なんかしてないのに私の夏用パジャマの胸部を押し上げ、大きく開いた胸元は、深い谷間を形成している。

所謂、ぱつつんぱつつんだ！ヒーーーーハアーーーー！！

しかも、胸の盛り上がりのために、上着とズボンとの間に隙間が出来て、パカパカしていやがる。

その後、部屋に戻ってグラスにお茶（緑茶）を注いで一息入れるとともに、お互いのこと、特に、聞かれるままに、こちらの世界のことを話した。

まあ、「このグラスが」だの「鏡が」だの、正直、どうでもいいことばかり聞かれた。

ちなみに、二階に戻る階段は、もちろん彼女の後ろだったよ？鍛えられたお尻（恐らくノーパン）と腰の曲線が壮観で、いろいろ大変だったことは報告しておこう。

スンさんの話しによると、仲間とパーティーを組んで『深奥の迷宮』に挑み、魔獣を討伐しながら最下層域にまで進んだところまでは良いが、最後の最後、『神魔獣』が居る筈の部屋はもぬけのからで、祭壇の上にあった水晶のような物を手に取った瞬間に、あの石室に彼女だけが飛ばされ？閉じ込められたのだとか。

それから、丸一日を掛けて、脱出のために石室内部を探ったが、床の転移魔法陣以外は発見できず、体力的にも限界で途方にくれていたとのこと。

ちなみに、神魔獣戦に備え身軽になるために、いくつかの装備と今まで得たお宝の数々、水や食料は部屋の外に置いてきていたそうだ。

「災難でしたね？」

「まったくだ・・・」

話しに一応の区切りができたところで、私は一階に降りることにし

たが、彼女は『仲間が救出にくるかもしれないから』と、開けたままの押し入れの扉から見える石室を見張っていることになった。彼女のいう魔獣とやらがどんなものか分からないが、石室に湧いて出た拳句、こちら側に出てこられては迷惑なので、彼女に『よろしく』と伝えて階段を降りた。

さあ、これから、楽しい『お洗濯の時間』が、はじまるよ！

堪能した。

あ、匂いを嗅いだりとかではないよ？そこまで変態ではない。匂いがしなかったとは言わないが！

最初の疑問の解明。彼女のブラジャーは敢えて云うなら、女性用のボディースーツの上半身部分のような形だった。

実にけしからんことに、カップのような形成はされておらず、厚めの生地で、胸前で数か所を紐で縛るといふ締め付けタイプ。大事なことなのでもう一度。実にけしからん。

まあ、女性が甲冑の下に着るならこういう作りになるだろうなあ、と少し感心はしたが。

予想どおり、パンツは無し。

次々と全自動洗濯機に放り込み、洗剤と柔軟剤と漂白剤をたっぷり打ち込んで「スイッチオン！」。（ここも自動なだけだね）

我が家の洗濯機は乾燥機付きなので、この量なら45分ほどで出来上がりだが、洗濯機の前で1時間近くも突っ立っているのは、洗濯機警備員になってしまうので、そそくさと二階に戻る。

部屋の扉を開けると、そこには……はい、スンさんはお休み中でした。

いやしかし。鞘に納められた長剣を豊満な胸に抱きかかえ、胸元まで捲れ上がったパジャマが絶対領域を形成している。ここにもあったんだね、絶対領域。

もちろん、下からだけでなく、パジャマの上からは抱きかかえられたために、更に盛り上がったEカップ（推定）が、今にも夏用パジャマの胸元から零れ落ちそうだ。

さらに、横向きで眠っているため、ウエストとヒップの標高差がああ、曲線がああああ！

申し訳ない、つい、取り乱してしまった。

でも、ホントに美人さんだなあ。

それが、私のベッドに横たわり、あられない姿でお休み中なのだ。これを「据膳」とは言わないが、寝顔を拝見するくらいは許されると思う。

で・・・洗いたての金色の髪は、まだ湿っているが波打つようにベッドに広がり、マスカラなんぞ必要としない長い睫毛が小さく震えている。

小さな桜色の唇は、つやつやだ。

そんなに私を信用しないでほしいのだが・・・

### 3 考えたら負けのようです。

スンさんを捕獲・・・ではなく保護したのは昼過ぎだったが、その後のムフフなイベントを消化している間に、彼女が眠りこけてしまったので、その寝顔を堪能している間に結構な時間が過ぎた。まあ、そればかりではなかったけど。

まず、まさかとは思ったが、押し入れの扉を開いた状態で固定した。大掃除中、いろいろ考えているうちに、何故か亀甲縛りになってしまった本や雑誌達を使って、何かの拍子に閉じてしまうのを防いだわけだ。

本さんと雑誌さんがドSであることを祈る。

スンさんによれば魔獣が出てくる恐れはあるのだが、それよりも次元の壁が閉じてしまって、彼女が帰れなくなる方が問題だ。

見たところ文明レベルは明らかにこちらが上だが、それでも、こちらの科学技術を使用しても次元とか空間の壁は越えられない。

あ、現状、既にファンタジーを肯定しているが、一方で、科学技術信奉者でもあるから、はっきり言っておくが、将来的にも次元と空間の壁は越えられないそうだよ？

いつぞや、ワープ航法について、その可能性を検討した論文が発表されたのだけど、それによると、ワープ以前に、人為的方法で次元や空間を超えるには、計算上ビックバンククラスのエネルギーが必要だそうで、論理矛盾になるのだとか。

かつて、中二病を患った私としては、けっこうなショックだったが、あにはからんや、少なくともSFの世界では、代わりにワームホール理論が脚光を浴び、未だに沢山の作品が作られ、むしろ、以前より、設定に無理が無くなった、といった効果があるのだとか。

まあ、そんなもんだ。

兎に角、現状で、私の部屋の押し入れとスンさんの世界が繋がっているとするなら、科学的にはワームホールによる一時的な現象と考えられるものの、ワームホールの発生や消滅が一時的とはいえ、その一時は宇宙規模の一時であり・・・つまり、一度、繋がった以上、数百年？いやいや、数千から数万どころか、数億年規模で繋がったまんまの可能性もあるわけだが、だからと云って油断は禁物。

まあ、このあたり『そんじゃあさあ！自宅の押し入れと異世界の迷宮がワームホールで繋がる確率は科学的にどのくらいなんよ？』なんて質問するのも、その答えを考えるのも無駄だと思う。  
現実に関がっているわけだし、その所は、やっぱり『考えたら負けかなあ』なんて思うわけで。

その他には、石室に入ってスンさん同様にあちこち調べてみた。  
一辺30〜40メートルの多分正方形の石室。

インカ・アステカもびっくりの見事な石組みで、まさに剃刀一枚入りそうにない。

装飾としては、私の押し入れの扉を石室側から装飾しているレリーフ、特に意味のある図形が描かれているわけでもなく、ありふれた唐草模様だった。

模様自体に意味があるとは思えない。唐草模様自体は、こちらの世界でも、古代遺跡にはありふれたもので、デザイン的に多少の違いはあっても世界中にあるそうだから。

「それにしても、石質はなんだろう？大理石？でも真っ黒だから黒曜石？」

なんせ、表面はピカピカに磨かれて、すべすべ。

気持ちがいいのでペタペタと触っている内に右手の人差指でカリカリっとしてみた。

んで、猛烈に後悔した。

ボロボロとあっさり削れてしまった。咄嗟に、明日の朝刊が脳裏に浮かぶ。

『日本人観光客が世界遺産を破壊』

血の気が引く。が、後の祭りだ。

誠に遺憾ではあるが、見なかったことにしよう。追及されたら「最初からそうだった」と言い張ろうと決意する・・・いや、やっぱり、素直に謝ろう。

どうせ、この手のことには責任の取りようがないし、深く反省していますから勘弁してください。

ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。もうしません！

気を取り直して、調査再開。

といっても、さて床の魔法陣。オーソドックスに二重円の中に、三角形を二つ上下逆に組み合わせた図形。その周囲にあるのは模様が文字か？

この手の物は考えても無駄なので、取り敢えず写メに何枚か撮ってお終い。

最大の疑問は、天井の・・・明りか???

全体的にぼんやりと光って石室全体を照らしているが、錯覚で無ければ、壁と同じ材質の石材そのものが光っているような・・・もう少し近くで調べたいところだが、天井までの高さが数メートルあって良く見えない。

後で、脚立でも持ってきて調べよう。

そうこうしている内に、お外は真っ暗になっていた。



12月は流石に日が落ちるのが早い。

慌てて明りを付けたが、相変わらず私のベッドではスンさんはエロっぽくお休み中で、でも、エアコンのお陰で寒くはなさそうだ。

だが、私はお腹が空きましたよ？

かつて一人暮らしを10年ばかりしていたお陰で、簡単な料理くらいはできる。

でも、スンさんをこのままにして下に降りるのは、魔獣とやらのこともあって危険だし、そろそろ起きて欲しいと思う。

こういう場合、声を掛けながらほっぺとか、オッパイとか、オッパイとか、オッパイとかをツンツンして起こしたいところだが、触った瞬間にバツサリとやられる恐れがあるので、やりません。

結局、少し離れた所から声を掛けるといふ、慙愧に堪えない方法を選択した。

「スンさん、起きてください。スンさん！」

「うううん・・・お願い・・・あと・・・あと、じ・・・じ・・・」

「・・・ご・・・？」

「・・・あと・・・5年、寝かせて・・・」

私の得た数少ない教訓に『美人の理不尽には逆らってはいけない』というものがある。

予想の斜め下をいくお返事を頂戴した私は、彼女の暫定放置を決定して夕食を作り、1階に降りることにした。

まあ、生死の掛った緊張状態から取り敢えず解放されたことで、疲れが出たのだろう。

ご飯を炊いて、豆腐の味噌汁を作り、豚肉に生姜焼きの素を振りかけてフライパンで焼く。焼きすぎると、辛くなるので注意。

最近は何でもかんでも激辛にする傾向があつて、『俺はトウガラシの50倍が好物だぜ!』なんて、聞いてもいないのに自慢げに発表する輩がいるが、なんなんだろうね、あれは? 味覚音痴を世間様にカミングアウトして、まずい料理しか作れない女性にアピールしているのか?

まあ、いいや。

付け合わせはキャベツの千切りで良いだろう。男の料理なんてこんなものだ。

ちなみに、ちゃんと二人分作りましたよ?

### 3 考えたら負けのようです。(後書き)

ん？サブタイトルはどうやって直すのだろう・・・

#### 4 食事のときは楽しい会話をするようです。

食事の準備が整い、そろそろ真面目にスンさんを起こそうかと考え始めた頃、トン・トン・トン、と階段を降りてくる足音が聞こえた。

むむ、生姜焼きの匂いで目を覚ますとは、やりますねスンさん。できれば寝ぼけていた時のように、女の子言葉でお話ししてください。

男っぽい話し方も萌えますが、そのギャップが・・・

「ご飯できてますよ、スンさん」

と、声を掛けながら目を向けると、スンさんが剣を片手に台所の戸口に立って、頭を盛大に掻いていた。

せっかくシャワーを浴びて汚れを落とすのに、乾ききる前に眠ったせいで、予想通り、長い金髪が暴発している。

ベッドに横になったままなら乱れた髪が色っぽく感じるのだが、立っているともないから不思議だ。

もつとも、地が美人さんだけに、『百年の恋も冷める』というよりは『ギャップ萌え』しそうだ。

「おお・・・すまない・・・」

男前だなあこの人。スンさんはそう応えようと、私の向かいの椅子に腰かけ、剣をダイニングテーブルに立てかけた。

箸のかわりにナイフとホークも用意しておいたのだが、スンさんは私の真似をして箸を手に取ると、見よう見まねで食事を始めた。

なかなか器用だなあと思いつつも、うまい、うまい、と連発する彼女が微笑ましく思えたが、そろそろ聞かなければならないことがあ

る。

「ところで、あなた、どちら様？」

「・・・ほお・・・どこで分かった？擬態は完ぺきのはずじゃがな」

「あらま？当たり前でしたか・・・」

このスンさんは偽物だ。

だが、バストサイズとかウエストのくびれとかが微妙に違う、私のエロメガネを見くびるな！というわけでは、全然ない。断じて違う！単なる勘だ。

これも勘だけど、多分、体そのものはスンさんのもので『中の人』だけが入れ替わっているようなそんな感じだろうか？

「わははは・・・正解じゃ。まずは、自己紹介からじゃな？わしは・・・神様じゃ」

背景に後光もなければ、玄界灘の荒波もなく、二人きりのちよつと寂しげな夕食の食卓で、急に爺様くさい口調になったスンさんは、あつさりとそう云った。

ちよつと、奥さん、聞きました？神様ですって！！

予想とはちよつと違っていたけど、まあマシな方向だったから良しとしよう。

魔獣とやらが乗り移っていたりしたら対処のしようがない。

「で、御用件は、やっぱり、うちの押し入れのことでしょうか？」

「あんまり、驚かんな？・・・が、話しが早くて助かる。」

「と、おっしゃいますと？」

ファンタジーの世界には、ストーリーとして勇者召喚とか異世界転生とか、いろいろあるが、総じて召喚主や神様に、結構な確率でタ

メロだったり、タメロになったりする。

がしかし、私は現状を無視すれば「社会人」なので、相手が何者であろつと相応の態度、言葉使いで対応すべきなのだ。

PTA・・・ではなくTPOに合わせるのは社会人の常識という話し？

「うむ。実はな、そなたに『深奥の迷宮』の最下層域を支配する『守護者』になつてもらいたいのじゃ」

「・・・？・・・ああゝなるほど・・・」

私としては『なるほど。じゃねえ！』と自分自身に突っ込みたい気持ちもあつたが、微妙に納得できてしまったのだから仕方がない。スンさんはこう話していた『「深奥の迷宮」の最下層域に、最後の神魔獣が居なかつた』と。

では、前任者はどこに？

「前任の『守護者』の方は、どうなさつたのですか？」

「あやつは、契約終了と同時に神に昇格して、どこぞで世界を構築しておるじやろ」

「神魔獣が神様になるのですか？」

「まあ、すべての神魔獣がそうなる、と云う分けではないがの。そもそもじや。神魔獣とは・・・」

面倒なので要約すると、神々が作つた世界であっても、人を始めとした生き物が存在する限り次第に闇は生じる。

かつては神々自らが生じた闇をその神力によつて滅していたが、本来、人は神の頂きに迫る『可能性』を宿しているはずなのに、闇を神々が滅していた世界では、まったく進化が見られず、むしろ衰退することが多かつた。

一方で、神々が地上への干渉を控え、闇を滅することを止めた世界では、比較的短期間に進化や発展が見られた。

その結果、神々の多くが地上を離れ、人々を見守ることにして、干渉を極力避けることにしたのだが、そうすると今度は、闇の力が人々を飲み込む事態が生じた。

そこで、闇をただ駆逐するのではなく、管理することにした。

神々は、闇の象徴とも言える魔獣を基本的に迷宮に縛るとともに、迷宮から大量の魔獣が溢れるのを防ぐために『守護者』を置くことにした。

「つまり、神魔獣というのは、本来魔獣ではなく、神々の・・・使徒。ですか？」

「そう云う事じゃな。なにぶん、役目から迷宮の最下層域に奉じられておるために、人からは魔獣の神たる存在と誤認されておるがな。魔獣に神は存在せんよ」

「ですが、迷宮を踏破する・・・冒険者ですか？には、神魔獣も討伐されているのでは？」

スンさん達のパーティーが冒険者としてどの程度のレベルにあるのかは分からないが、既にいくつかの迷宮を『踏破』してきているらしい。

つまり、神魔獣Ⅱ守護者を倒している。

まだ、引き受けると決まった分けではないが、守護者を引き受けた途端に、冒険者たちの討伐対象になるのは正直、御免だ。

それに、まだ、納得できない部分もある。なぜ、私？

「まあ、ある程度のレベルに達しておる連中が相手の場合は、死んだように見せてはおるがの。本当に死んでしまつては、迷宮そのものが機能を失うでな。誤認されておるならいっそのこと、そのまま

にしておいた方が此方としては都合がよいで、姿形も魔獣のように見せておるのよ。もちろん、そなたが引き受けてくれた場合はじゃ、十分な能力を授けるで、守護者としての役目は果たせるはずじゃし、後は、まあ、世界をブラブラしながら、適当に冒険者の相手をしておればよい。ああ、ところで、この話し、断つても構わんが、そうすると、そなた。もうすぐ死ぬぞ？」

なんですと？



#### 4 食事のときは楽しい会話をするようにです。(後書き)

設定があ・・・めんどくさいです。

## 5 食後は運動するようです。

あれから暫く自称神様とのお話しは続き、私の疑問もいくつか解消され、条件付きで、神魔獣・・・いやいや、守護者を暫定的に引き受けることになった。

どうも、私、3日後には死ぬみたいですし、どおせ、ですから。

はははぁ・・・お正月に死ぬんですか？・・・私、今から、グレテモイイデスカ？

まあ、死んだ瞬間に真っ白な世界に連れ込まれて、とか、いきなり転生させられて、とかよりは事前説明があった分、良心的？な感じがするが、拒否権のない交渉は不毛以外のなにものでもないわけでお話しの終わった後、神様はきつちりと夕食を召し上がって帰って行かれました。

まあ、そのまま二階に上がっていき、元通りにベットに横になったただだが。

おおっ！オツパイのはみ出し加減まで、元通り再現しましたよ？グツジョブ！神様！

仕事としては、神様の加護で、こちらの世界での生活は保障されるが、守護者としての業務もこなしながら、異世界を自由に探訪して良いそうだ。

というより、何となく異世界探訪の方がメイン業務のような気がする。

しかも、守護者と神魔獣の関係や神様の存在について守秘義務を守る限り、こちら側の知識や事物の持ち込みも自由だ。

その代わり、神様の加護による生活保証といっても、何もしなくてよい分けではなく、異世界で何らかの収入を得ると、こちら側で同

価値の収入が発生する仕組みになっているのだとか。

あれれエ？・・・それって結局、こちら側の世界では、ですよ？・・・世間様的には相変わらず、私って自宅警備員なんじゃ？・・・  
iiiiiiやあああああ！

ま、それはそれとして、神様が本当は私に何をさせたいのか良く分らないが、兎に角、二つの世界の行き来には、我が家の押し入れが使用される。

残念ながら、神様といえども、異世界間の「ど　でもドア」は世界にかかる負担が大きいそうで、押し入れと「神魔獣の間」がデフォルトで繋がったまま、それではとてもなく不便なので、神魔獣の間にある転移魔法陣で、地上との行き来をすることになる。

ちなみに、私が授かった能力は、前任者が持っていたものと同等の力だそうだ。

もちよつと詳しく、と粘ってみたが、全部分かってしまつては面白くなかつと返された。

まあ、神魔獣の能力に関する情報なら、スンさんに聞けばある程度分かるはずだし、目を覚ましたら聞いてみようと思う。

しかしだ。

この人、ホントよく寝るなあ、まさか本当にあと5年も寝るつもりじゃないだろうな？なんてことを考えていたら起きました。

幸い、目が覚めた途端に斬りかかられるといった、心配された事態にはならなかった。

「・・・うん？うん・・・おはようシュン」

「まだ、こんばんわ、ですよ、スンさん？」

それでも8時間以上は眠っていたはずなので、休養十分なのか、ベ

ツドに横たわったまま、大きく伸びをする。

スンさん、かわいいです、かわいいですけど、やめてください！その幸せそうで満ち足りた、無防備な素敵な笑顔は！美人さんのそういう姿は私には猛毒です。主に精神面で！

さっきの会話だって、恋人どうしならどれだけ甘い会話か！？

でも、せっかくなので・・・『ほ てま やろ～～～！』（心の叫び）

「お腹、空いてませんか？少しだけご飯が残ってますが？」

「いや、不思議だな？あまり空腹を感じない。さっき貰った食料は特別なものののか？」

「いいえ。ごく普通のパンと飲み物ですよ」

神様が、その体を使って飯食ったとは云えない。

どうでもいい会話で自身の黒い想念を誤魔化しつつ、精神の立て直しを図る。

今更だが、云っておこう。

私は、かなりHだ。それもかなり守備範囲の広い。

ただし、どんな場合でも、相手の明示の或いは黙示の了解がある場合に限る。

「そうか？」

「そうですよ」

せっかく立て直しつつあるのに、スンさんはまた笑顔を見せる。自分でも分かる。耳が赤くなっているのが。

スンさんはそのことを知ってか知らずにか、クスクスと笑う。

ああ、駄目だ・・・見つめないで・・・

結論から申しましょう。いろいろお話した末に・・・

スンさんとエッチしました。

抱きしめたスンの体は思った通り、素晴らしい弾力と柔軟性を持っていた。

.....都合により削除されました.....

その後、外が明るくなるまで、何度もスンと交わった。

正確には、明るくなってスンが息も絶え絶えに「お腹が空いた」と抗議するまでだ。

なんか、いろいろごめんなさい・・・すごく、良かった。

## 5 食後は運動するようです。(後書き)

ちよつとえつちいですか？

エツチ過ぎたみたいです一部削除(11/21)

## 6 お迎えが来るようです。

それから二日間、食事をする時とスンが気絶した時を除いて、ありとあらゆる男のロマンを叶えて貰った。スンには、何がロマンなのか分からなかったみたいだが。

お陰さまで、インターバルでの会話を通じて、いろいろな事が分かった。と云っても、世界の成り立ちやら、基本ルールとかは、神様から直接ご教授頂いていたので、主に、スンやその仲間達の情報の方だった。

「じゃあ、スンは剣士で前衛なんですね？」

「・・・シヨウ。少し気になるのだが、どうして私を「さん」付けで呼ぶのだ？「スン」と呼び捨ててくれて構わないのだが？」

少し拗ねたように問いかけるところの、このスンだが、エッチな気分の時は女の子言葉なんだが、何故か、それ以外では凜々しい男言葉で話す。まあ、そのギャップに萌えるうえに「して！？」のサインになっているから非常に分かり易くて、大変よろしい。

「スンさんがそう言うってくれるなら、呼び捨てにしますよ？・・・スン・・・」

「シヨウ・・・私はいいい歳だからな。迷惑かも知れんが・・・だが、私はシヨウを縛ったりしないぞ？」

「そんなことはないよ。スンは本当に綺麗だ。スンみたいに綺麗な人と・・・なんて、夢みたいだよ。」

そう云って、スンの頬を撫でると、うれしそうに微笑んだ。ちなみに、上の会話は全て、二人とも全裸でなされている。



実際、スンは美しい。そして、とても可愛らしくもある。

で、このとき気が付いたのだが、本人曰く、28歳だそうだが、年の割に肌ツヤが異常に良くはないだろうか？まるで10代の娘のような。

女性は性的に満たされると、肌ツヤが良くなるとは云われているが、スンのそれはちょっと異常では？と思われた。

私の守備範囲は異常に広いので、30代だろうと、40代だろうと、その時々 of 美しさを愛でるから年齢は全く気にしないのだが、今のスンを見て、30歳前後と判断する男は、恐らくいないだろう。なんなんだ？まあ、悪いことではないからいいけど。

そんなこんなで、二日間を過ごし、神様の教えてくれた時間が迫ってきた。

ええまあ、・・・なんだ・・・あれだな・・・。

神様がおっしゃるには、あと数時間後にはスンの仲間の魔術師が隣に転移してくるので、その人にくっついて、一度、迷宮を出るように云われている。なんでも、私がこちらの世界から消えている間に、「私が事故死する因果律に手を加える」のだそう。

幸い、スンを迎えにくる魔術師に頼めば、転移魔法陣に手を加えて迷宮の外から直接お隣の部屋に戻ってこられるそうなので、最低三日間ばかり遊んで来いと。

遊んで来いと云われても、先立つ物が無い分けて・・・と思っていたら、ピンときた。

スンからの情報で分かったことだが、あちらには碌な鏡が無いらしい。というより、そもそもガラス自体が非常に貴重で、基本的に王侯貴族の持ち物。

鏡に至っては、ガラスを完全に透明にする技術や板状にする技術が未発達で、どうしても気泡が混じるし透明にならないので、ガラス

鏡の発想がない。

一般的には、そのまま水鏡か銅鏡が使用されているそうで、貴族やお金持ちになると、映像を直接映し出す魔術具を使用するらしい。どおりで、洗面台にある縦横1メートルちょいの鏡に、スンの食いつきが良かったわけだ。

しばらく、固まっていたからなあ・・・

ちなみに、こちらの世界で、昔、使用されていた銅鏡も、腕のいい職人さんが磨くとかかなり美しい映像を結ぶのだが、大きなものを作ると、どんなに手を尽くしても素材の重量や温度変化などで歪むため、一定の大きさ以上のものは作られなかったらしい。

まあ、銅鏡自体が財力や権威の象徴だった太古の時代を除けばだが。

なにはともあれ、当座の収入源として鏡を持つていこうと思う。近くのコンビニに行けば、一つ300円〜500円位で売っているだろうし、大小取り混ぜて、リュックに入れておこうと思う。

「何を考えているの？ シュン」

はい、きましたよ、女の子言葉。

さっきまで窓の外を「観察」していたはずのスンが、窓辺に立ってこちらを見ている。

金色の髪が陽光を浴びてキラキラと輝いている。

もう夏用パジャマの上着がデフォルトになりつつあるのに、その姿に異常な劣情を催すのは・・・しかし当然だと思う。

スンは、それ以外何も身に着けておらず、しかも、ボタンさえ閉めていないのだから。

「こっちにおいで、スン」

云い忘れていたが、スンと交わるようになってから、自分自身も不思議に思うことがある。

私は体力には自信が無い。子供のころから短距離は得意な方だったが長距離になると全く駄目だったのに、今は、全然、疲れない。

心地よい疲労感はあるが、すぐに回復する。

エツチは別腹とか？んなことああない。

それなのに、なぜか、スンが気絶するまでやってしまう。（かわいいから！）

もしかして守護者を引き受けた影響なんだろうか？

そんなふうに、私はいろいろ考えを巡らしていたが、いつもどおり、次第にスンの体に溺れていき、スンは私の下で、もう何度目かの甘い嬌声を上げている。

結局、私の思考の終着点は「ま、いいかッ！」だったのだが・・・思考が外に漏れていたらしい。

「良くありません！」

「キャッ！」

「おうッ？」

まだ、時間はあると思っていたのに、やり過ぎました。

スンとイチヤイチャしている間にも時間は等速で流れていき、アイシユタインさんの相対性理論は適用されず、いや適用されたのか？兎に角、気が付けば予定の時間。

本当ならそれとなくスンに服を着せて、お茶でも飲みながら「その時」を待つ予定だったのだが、いつの間にか、押し入れの扉の向こう側に、可愛らしいお嬢さんが真っ赤な顔で立っていて、スンを押し倒している私を睨みつけている。

彼女の足元にある、亀甲縛りされた本さんと雑誌さんがシュールだ。唯一の救いは、私とスンの腰から下が毛布で隠されていたことだけだろう。

しかし、まあ、あれだねえ。

異世界の女性てえのは、ナニかい？

初めて会う異世界の男に対しては、おっかない顔で殺気を放つものかい？

いえ、違うと思います。  
すみません。

6 お迎えが来るようです。(後書き)

ううん。エッチな思考が止まらない。

## 7 ようやく旅立つようです。

大晦日の夜ともなれば、ある人は2年参りに神社へと向かい、ある人と小動物は炬燵で丸くなって紅白でも見ながら「平和に」過ごすところ。

私はというと、殺気の漏れる我が家から、一路、コンビニを目指して、盗んだバイクで走り出したところだ。いや盗んではないけどね、原付だし。

ああ、逃げたさ！

私より若干大きな体でありながら、必死に「行かないで」と目で訴えるスンを残して。

あそこで、私が着ていたシャツの袖口をチョコンと掴まれたら、逃走を断念せざるを得なかったことだろう。スُنにそういったスキルが無かったことが幸いした。

ええ、私は卑怯者です、ヘタレですとも！

一応、状況説明はしたのだが、少女の怒りは収まらず、仲間達がこの三日間、どれほど心配したかとか、姿を消したスンの居場所を探るために、アリス自身がどれほど気力と魔力を振り絞ったかとか、漸く見つけたスンの気配を頼りに転移するにしても、初めての場所への転移がどれほどの恐怖だったかとか、それなのに・・・と、目に涙を溜めながらトクトクと小一時間、お説教をされました。正座でね。

まあ、私も悪かったとは思っているんだ。

アリスさんが怒りに震えながら異世界の扉を超えようと、トテトテと踏み出したとき、彼女の下に、頼んでもいないのに神様が舞い降りてきた。主に笑いの神様が。

で、亀甲縛りの本さんの方に躓いて、「ペキヨ」って感じでこけてしまったのだ。

幸い怪我は無かったが、私とスンは我慢できなかった。

「ッブッ！」

フローリングの上にカーペットを敷いていても、正座する人間にとつては「焼け石に水」であることを、身を持って体験できたことを喜ぶべきだろうか？

かくして、スンは単独でアリスさんを宿めることに全力を尽くし、私は理由を付けてコンビニにお泊まりセットと鏡を買いに走り、大晦日の夜は夜更け過ぎに雪へと変わるところか雨さえ降らず、沁みるような寒さだけが私の体を締め付けるのであった、まる。

ということがあって、私が30分程でコンビニから戻る頃には、アリスさんはどうにか落ち着き、それどころか、我が家の内部をダンジョンよろしく探索し、各種の「財宝」をせっせと、どこから出したのか袋に詰めていた。

「シユンさん、これも良いですか？」

「ああ、いいですよ。そんな物で宜しければ」

アリスさんが示していたのは、プリンター用紙の分厚い束（未開封）だった。その他にも鉛筆と消しゴムとか。愛用の0.28ミリの赤のボールペンや半透明の物差しを、机の中から発見した時はえらい騒ぎになった。

魔術師だからそういったものに目がいくのだろうか？ものすごくうれしそうで、駄目とは云えない。まあ、買い置きもあるし。

それにしてもちっちゃいなあ、と、私は嬉々として袋詰めする少女を見守った。

アリスさんは茶髪のセミロングに黒い瞳、身長は140センチ前後と小柄で、お人形さんのように可愛い少女だ。推定14歳とみた。

私は、ロリ「も」好きだが、この場合はあくまで「愛でる」対象としてであって、青少年保護育成条例に違反するようなマネはしない。まあ、条例は基本的に属地主義をとっているから、異世界でナニをしようと……で、無駄知識が……orz

スンの方は、しきりにグラスや鏡を持ち帰りがつたが、取り外しが異常に面倒だし、割れる可能性が高いため諦めたようだ。可哀想なので、買ってきたばかりの黒のコンパクトを進呈したら凛々しい顔が赤くなった。いまさらですか？

その他には1リットルのペットボトル（中身入り）を2本と、子供の頃に何かの懸賞であたって、筆筭の中に仕舞い込まれていた安物の天体望遠鏡。

そして最後に、恥ずかしそうに「パジャマが欲しい」といった彼女に激しく萌えた。

ちなみに、我が家にある電子機器全般については、向こうでは何の役にも立たないガラクタだからと説明したら二人ともすんなり納得してくれた。必要なら何時でも取りに来れば良いしね。

ちなみに、これらのお宝は、私の異世界探訪の一步として、三日間の護衛兼ガイドの報酬と、私が異世界人であることや我が家の押し入れの秘密についての口止め料だ。

スンにプレゼントしたコンパクトとパジャマは別として。

随分安いな、とは思ったが、スンによると、私の用意したコンビン鏡一枚で十分な報酬に成り得るそうだ。アリスさんも同意見だったのでそうなのだろうと思う。



アリスさんによると、恐らく、一枚あたり金貨10枚は下らないとか。  
貨幣価値が良く分からなかったが、いろいろ聞いて、貨幣価値をこちら側のレートに換算すると約一千万円？・・・後、6枚あるんですが。

私が向こうに行きたい理由は、単に旅がしたいというより「冒険者になりたい」と力説したら、溜息交じりに納得してくれた。三日間だけだしね。

アリスさんによると、あちらでも、お貴族さんのボンボンとか、いくらでも贅沢に平穩に暮せるのに、わざわざ冒険者を志す若い子は多いのだとか。私は若くはないですよ？

この時、スンが微妙な顔をしていたのには気が付かなかった。

さて、私の持ち物だが・・・

以前、出張したときにボストンで購入したリュックサックに詰め込んだのは、コンビニで購入したお泊まりセットとコンビニ鏡。その他には、非常持ち出し袋の中にあつた食料と、手動と太陽光で充電できるLEDライトに使い捨てカイロ、下着数枚に、台所にあつた袋麺は紙袋に入れて大量に持っていくことにした。

武器？なにそれ、おいしいの？・・・スンが予備の剣を貸してくれるそうだ。

「じゃ、そろそろ行くわよ？」

アリスさんは意気揚々とお宝？の詰まった袋を担ぐと、足取り軽く、でも慎重に、押し入れの扉を固定する亀甲縛り（しつこいけど、ここ重要）された本さんと雑誌さんを跨いで、転移魔法陣の前に進んだ。

その際、全身を覆う黒いローブがちょっと引っかけた。裾をズリ

ズリ引き摺るから。

ううむ。もし、仮に、本さんがドSだったなら、この三日間で亀甲縛りされるは、耽美な魔女っ子に蹴られるは、跨がれるは……  
・・やめよう。

「ん？みんな一度に転移できるんですか？」

「当たり前じゃない！私を誰だと思ってるのよ？『イスファアーナの天才』とは私のことよ?!」

「うむ。アリスは大陸きつての優秀な魔術師だからな」

スンがそう云うのなら大丈夫だろう。「しらんがな!!」というアリスさんへの突っ込みはしないでおいた。必殺のボケ潰し……なのだが、分かってもらえない。

それより、スニーカー忘れたし。いかんいかん、と頭を掻きつつ取りに行く。

そして、アリスさんがどこから取り出した杖を頭上にかざして、何やら呪文を唱えると、魔法陣が……で、テンプレなので以下省略。

「シギやああああああ!!!!」

はいはい。

7 ようやく旅立つようです。(後書き)

しんどいゾ ストックがキレてきたぞ

今頃気が付いたサブタイトルの間違い(11月15日)

ん? ルビが付いてる? なんで? どうして?

## 8 イベントが発生したようです。

蜥蜴だな。

全体の形は、そのまんま蜥蜴なんだが、黒をベースの銀の縞模様がヌラリと光り、ショッキングピンクの尻尾がクネクネしている。なぜピンク？これで体長7〜8メートルでなければ、私的には「可愛い奴」で済むのだが、オツカナイ顔で威嚇されちゃあ台無し？

「おお！スン、アリス！無事だったか？すまんがちよつと手伝え！」

転移の余韻も収まらないうちに遠くから声を掛けられた二人は、「シユンは此処にいる！」と言い残し、アリスさんは担いでいた袋を投げ出して杖を振り上げ、スンは腰に差した剣を引き抜き、蜥蜴に向かって走り出した。

私はというと、投げ出された袋を回収して、広大といってよい部屋の隅に逃げ出した。

プロフェッショナルの仕事に素人が口出ししても、良い事など一つもない。

「なんでこんな所にシルバリーザードが？！あいつは20階層の魔獣じゃない！」

「さあなあ・・・まあ、出てきちまったもんは、しょうがあんめえ」

最初に声を掛けた髭面の男は、壮年の大男で全身甲冑に身を包み、巨大な盾で尻尾の一撃を撥ね退け、それと同時に右手に持った斧を叩きつけている。が、ギン！という鈍い音がするだけで攻撃の効果は薄いようだ。

相当固い鱗に覆われているのか、直ぐにスンも駆け寄り、頭部に近い部分に剣を叩きつけて牽制するが、明らかに剣筋が流れている。

他にもスンの仲間が槍や弓といった得物でヒットアンドウェイを繰り返している。

効果が薄いとはいえ、大した連携だが、魔獣の方も尻尾と巨大な顎で攻撃を蹴散らし、隙あらば一気に齧り付くべく機会を狙っている。

しかし、もっとも驚くべきことは、スンの動き。

あれが内力系魔術「身体強化」だろうか？目で追えない程ではないが、人間の出せる速度を遥かに超えて移動を繰り返している。

「みんなあ！お待たせ！離れて！！！」

一人だけ距離をとってアリスさんが、ひと際大きな声で叫ぶと、それまで、蜥蜴を囲んでいたスンと3人の男たちが、あつという間にアリスさんの周りに集まり、防護壁を築く。

なるほど、牽制だけでなく、足止めの効果もあったわけか。

「我が前に現れ出でよ、其は殲滅の炎、嘆きの風と共に、ファイヤーストーム！」

詠唱のたびにアリスさんの構える杖の正面に、直径1メートル程の魔法陣が浮かび上がり、最後のキーワードと共に、そこから巨大な炎が渦を巻いて吹き出される。

炎の渦は蜥蜴を押し包むように広がり、一気に燃やし尽くした。すげえええ!!!

「G U G Y A L A L A L A L A L A . . . . .」

蜥蜴は最後の力を振り絞って、2・3歩、こちらに向かってきたが、すぐに力尽きて地に這った。

「ふいい・・・あつぶねえあぶねえ。やっぱシルバーリザード相手に魔術師無しはキツイわな！がははははあ！」

「そうですか？その割には楽しそうでしたか？」

「そうそう！『アリスとスンの帰還とどっちが早いかなんて、云ってなかったっすか？』」

最初が大男、次が弓使い、最後が槍使いの少年だった。年齢も概ねその順のようだが、真ん中の弓使いが一番のイケメン。しかも、イメージどおりの丁寧語。

イケメン死すべし！

それは兎も角、なんだが、私、忘れられていませんか？仲間の再会と今の戦闘のことで盛り上がってますが？「やっぱ嬢ちゃん魔法はすげえな！」とか「スンさんのアクセルも大したものです。」とか・

フンフン、ぐしゅんぐしゅん・・・

私は大人だ。小さなことに目くじらを立てたり・・・しないもん。ホントだお？

目くじらは立てないが幼児退行はする・・・というか、した。

その後、私のことを思い出してくれたスンによってメンバーに紹介され、改めて三日間の護衛とガイドを依頼した。

リーダーの大男ダークさんには「スンが世話になった」と握手しながら礼を云われ、依頼を快く引き受けてくれた。私の手が壊れるのでヤメテ！

槍使いのチャックさんは明らかに私より年下（１７歳くらい？）にも関わらず「ようよう！あんたシュンだっけか？スンの姐さんと三日も何してた？姐さん何かテッカテカだけど？」とニヤニヤされたが適当に誤魔化した。

私とスンの関係は『大人の関係』だったと理解している。所謂、『吊り橋効果』の結果に過ぎないので、アリスさんにも口止めしてある。

弓使いのグスタフさんは爽やか且つスマートに「よろしく、依頼人殿」とだけ云った。

その後、手分けしてシルバーザードの爪20本を回収して『神魔獣の間』を後にした。

なんでも、神魔獣の間からは転移魔法が使えないらしい。アリスさんが設置した魔法陣はその部屋にあった魔法陣をアレンジしたもので、例の部屋との行き来専用には使えない。

理屈は良く分からなかったが、神様の事前説明どおりということか。

神魔獣の間の前室には、パーティーの荷物が置かれていた。

どこの迷宮も、おおよそ10階層ごとに大魔獣の部屋があり、その前室は安全地帯と考えられている。通称、『決断の部屋』

その他にも、幾つかの安全地帯が存在するが、それはランダムに存在しているため、余程、踏破率の高い迷宮で無い限り、その位置はそれぞれのパーティーの秘密とされる。

パーティーメンバー以外は全て競争相手、性質の悪い冒険者の場合は敵にさえ成り得るのだから、当然と云えるか。

「んじゃあ、一服するべ。腹も減ったしな」

ダークさんの指示で、一休みすることになった。

荷物に異常がないか調べ、チャックさんが火を起こす。神魔獣の間に侵入する前にも此処で野営でもしたのか、石を集めて作られた釜戸がある。

枯れ木など無いからどうするのかと思ったら、荷物の中から蠟の塊

のようなものを出して少しずつ削りながら釜戸にくべていく。  
結構な火力だった。

「でもダーク。食料は殆どありませんよ。白湯で我慢です」

「えええ？マジッすか！」

「あ、あの・・・これよかったら、詰まらないものですが、どうぞ  
！」

私は、持って来ていた袋麺（日本の誇るチンラーメン）を差し出した。

初対面の人との円滑なコミュニケーションを図るには、贈り物が効果的。

賄賂？何それ、おいしいの？・・・この場合は美味しいです！

だって、私は『大人な社会人』だから。



## 8 イベントが発生したようです。(後書き)

だんだん、つじつまがあ・・・でも突っ走ります。

## 9 第一階層はピクニック気分のようにです。

私たちは現在、『深奥の迷宮』50階層のうちの第1階層に來ている。一番上だ。

見渡す限りの草原が広がり、起伏に跳んだ地形に所々ブッシュが広がっている。何処から風さえ吹いているのに、明らかに屋内の雰囲気がある。空が無い。かなりの高さに天井があつて、例の部屋の天井と同じく、薄く光っている。

私たちは、その奇妙な草原の中を、そこだけは踏み固められたと思しき道を歩く。

最下層域で食べたラーメンについては、鍋が無かつたのでそれぞれのメンバーの鉄製カップにアリスさんが水を作り、それを釜戸で温め、沸騰したところでラーメンを半分ずつ投入。ざつと3分待つてから「飲む」ことにしたのだが・・・

みんなが「これいけますね」とか「おいしい」とかそれぞれ発言するなか、一杯目を飲みほしたダークさんが、無言で残りの欠片を見つめるので、慌てて「もう一つどうですか」と、大人の対応をした私。

結果、私が持っていた某デパートの紙袋は、現在、ダークさんのふつとい腕の中に大事そうに抱えられている。二つとも。

大盾と斧は一緒にたにされて背中に担がれている。それでいいのか？ダークさん！？

一服しながらアリスさんが披露目した我が家の「お宝」の数々より、そっちですか？

帰還用の転移魔法陣に現れた私たちを、若い冒険者グループが遠くから眺めていたが、特に近寄ってくることはなかった。

ただ、「おいあれ！鉄壁のダークじゃないか？」とか「風の旅団！来てたのか！」みたいな声は聞こえていたが、みんな気にした風もなく、スタスタと出口と思いき方向に歩いていく。有名人なんですねダークさん。

そして、あちら此方で、複数の冒険者が得物を追っている様子が目に留まる。珍しそうに眺めていると、小遣い稼ぎと経験のために、小物の魔獣を狩っているのだと、後ろを歩くグスタフさんが教えてくれた。

「チャック、右前方20。ブレードラビット3だよ」

唐突にアリスさんが呼び掛けると。「あいよ」と、緊張した風もなくチャックさんが小走りに前に出る。

そして道の脇にあったブッシュが揺れたと思った時には、何かがチャックさんに飛び掛かったが、シュンシュンと槍が鳴って、ぽとりと地面にウサギが転がった。

「すごいですね、チャックさん！あの一瞬で、眉間を一撃なんて！」

チャックさんの早技に称賛の言葉を贈ると「へえ、良く見えたな」と逆に感心された。

いや、確かに早くて正確で見事な攻撃だったが「見えない」という程ではなかったので、「そうですか？あはは」と曖昧に答えた。ピバ！日本人！

ブレードラビットは油断さえしなければ、一般人でも狩ることができる最下級の魔獣の一種で、前足の中指の爪が異常に発達して刃になっている。このブレードが良く切れるため、剃刀の代わりに理容や美容に需要があるのだそうだ。

ただし、非常に繊細で、狩りのときに下手に攻撃を受けると傷付いてしまい、売り物にならなくなる。そのため、先制攻撃で、一撃で仕留める技量が必要になる。

「まあ、ブレードラビットを上手に狩れるようになったら、次の階にいつてもいいかなってところだな・・・うまく狩れなくても、肉は売れるしな。第1階層なんて、俺達にとっちゃ、ピクニックみたいなもんさ」

「へええ」と感心する私。うむ！チャックさんは褒めたら伸びる子と見ました。今後も、どんどん褒めよう。

それにしても気になるのがスンだ。転移前に私をみんなに紹介した時以来、まったく私と会話をしてくれない。短い夢だったかあ・・・まあ、しょうがない。諦めは良い方だ！

私の容姿は中の中、臍履して中の上。背も低い。明らかにもてるタイプではないから、スンとの寝物語を真に受けるほど自惚れたりもしないし、一度そういう関係になったからといって、しつこく迫るのも性に合わない。スンもそうだろう。

「どうだい、ちょっとやってみないか？なに、俺がサポートしてやるよ」

「へ？」

「へ？じゃねえよ・・・いくら俺達が護衛に付くからって、やつば、一応護身くらいはできて貰わなきゃ。あぶなっかしすぎるぜ？」

「そうですね。ショウさんの力量をみるためにも、いいかもしれませんね？どうです？」

そう云われましても・・・そんな期待に満ちた目で見ないでえ！私はそういったプレッシャーに弱いんです。困った顔でダークさんを見ると、我関せずの表情で紙袋を覗き込んでいる。駄目だ、この

人。

ラーメン見てトリップしてやがるな？くおのおお、スットコドッコイツ！

「やってみれば良いじゃないか？“シヨウさん”。武器はわたしのショートソードを貸そう」

あれれえ・・・“スンさん”君まで？もしかして、イジメデスカ？なぜ？ドウシテ？

なし崩しに弱い私。ああ、良くも悪くも日本人。

しかし、できなくても頑張ってみるのも日本人。

良いでしょう。剣道初段の腕前。お見せしようじゃありませんか！スンからショートソードを受け取って前衛に立つと「俺はあくまでサポートってことで」と左側にチャックさんが並んでくれた。

ちなみに、生き物を殺すことに対しての精神的負担は、私にはあまりない。

どんな方法であれ、生きるために必要なら、私はそれを肯定する。私の父はかつて漁師だったからか、少しばかり知恵が付いた頃には自分が生きるために、多くの生き物を殺しているのだということに気が付いていた。

そのおかげで、自分が生きていること、生活ができていることに。

「正面20。ブレードラビット2」

アリスさんの声で私の足が止まる。2匹のブレードラビットはブッシュを飛び出し、一目散に此方に走り寄ると、助走を付けてジャンプした。

私から見て、左手の一匹が先に、続いて右。2匹の間隔は1メートル弱。

私は、腰に構えたショートソードを、右足を斜め前に一歩踏み出しながら抜き打ち、そのまま左のブレードラビットの右をすり抜けながら正面から水平に首を狙う。

しかし、ブレードが邪魔になることに気が付いて、咄嗟に剣筋を跳ね上げ、すれ違いざまに上から首に落とし、そのまま振り向きざまに、今度は下から右側のブレードラビットの首を刎ね上げた。

「はいッ？」

「・・・！」

「あれえ？」

最初がチャックさんで、次がスン。最後は私。道端に転がる2匹の魔獣と、首を傾げる私に、みんなが驚きの視線を送ってくる。

ハッと気が付いて、ショートソードの血を振り飛ばして、カッコよく鞘に納めようとして落つことしたのは御愛嬌。

ピクニックは危険がいっぱい、というお話し。

## 9 第一階層はピクニック気分のようにです。(後書き)

ほかの人ってどうやって書いてるんだろう。

私は書きたいという気力だけ。

なんか、読んでくれる人もいるみたいなので、せめてちゃんと物語的に盛り上げて終わらせたい。

## 10 気が付けば最強のようです。

「やるじゃあねえか・・・がはははあ！」

と笑うのは髭面のダークさん。

ラーメン見ながらトリップしていた分けではなかったらしい。

私の剣技にあきれたように見つめる他のメンバー。

「兄ちゃんよ？あんた素人じゃなかったのかよ？おれの出る幕ないじゃん」

「そうね？ちよつとはやるみたいね。アクセルも、まあまあ見事だったわ」

「本当に、お見事です。しかし・・・」

「・・・」

いえ、いえ、私は素人ですよ？高校の部活で剣道はしてましたけどその程度じゃ、実践には物の役に立たないくらい分かりますよ？ていうか、例外はあっても実戦に役に立たないことが分かったから、一時期、本気で辞めようと思ったくらいですから。

それと、アリスさん？アクセルってなんですか？

ん？まさか、私が守護者だからですか？神様！あなたナニしてくれちゃってるんですか？

ぷるぷるぷる・・・ぷるぷるぷる・・・

ジャパニーズスキル「曖昧笑顔」で誤魔化していたら、Gパンの左前に入れてあった携帯がぷるぷると振動した。通話はムリだろうと思っていたが、なんとなく癖で持って来ていた携帯電話。時計や写真なんか其れなりには使えるし。



しかし、友達の少ない私のこと。携帯がぶるっても、電話だと思っ  
ことではない。メールも登録したビデオ屋さんや本屋さんの「お知ら  
せ」程度。思い当たるのは何かで自分で設定したアラームか？

ぶるぶるぶる・・・

三度ぶるぶるした時、私は異常に気が付いて慌てて携帯を取り出し  
て開いてみると、画面表示は「555 - x x x x . . .」の電話番  
号が・・・

みんなに「ちよつとすみません」と断ってから携帯を耳に当てる。  
視線が痛い。

身に付いた礼儀はおそろしい。

「うむ・・・神じゃ」

予想通りだった。予想通りすぎて全く驚けない。555から始まる  
電話番号はハリウッド映画で使用される架空の電話番号だ。芸の細  
かい神様だ。

だが、今はそれは置いて。私の守護者としての能力について聞  
かなければならない。

この微妙なタイミングでの電話も意図があるに違いない。

しかし、質問を投げかける前に神様は応えてくれた。

「お主の体は守護者を引き受けてくれた時に、神竜にしておいた。  
まあ、人の身に少々強引に押し込んだでな。入りきらなんだ部分は  
魔力にしておいたかの」

「・・・あのおくもひもひイ？」（by ふじやまかんび様）

「まあ、それでも十分とは云えんでな。1年ほどかけて少しずつ変  
化していくで」

「・・・結局。わたしって、人間じゃない・・・？・・・とか？」

「今は、まだ、人じゃよ」

“今は”って・・・“まだ”って・・・なに？・・・私の前任者って神竜だったの？

幸い、鱗とかは生えてこないらしいが、いつの間にか私は、人間では無くなりつつあるらしい。ふと気になって聞いてみた。

「あの。もしかして、神竜の能力の中に、若返りってありません？」

「・・・そうじゃの、まだ、効力は弱いじやろうが、そなた自身も含めて、そなたの血肉は他種族にとっては再生（若返り）と身体強化の霊薬になるの。まあ、そもそも、この世界にそなたを傷つけることのできる者など、殆どおらんがの。ふわははは」

ちよつと話し込んでしまったが、纏めると、私は人の姿をした神竜で、いずれ完全な不老不死に至るらしいが、人の身に入りきらなかった神力は、魔力に変えて与えられているのだそうだ。

そして、私の精を受けた者に神竜の加護を与え、若返りと身体強化の恩恵を与える。スンの若返りが微妙なのは・・・ちゃんとコンちゃん使ってたから！（男の責任だぞ？）

なお、若返りは詰まる所、究極の再生能力だが、赤ちゃんにまで遡ることは無く、もっとも身体能力が高まる年齢までとのことだった。

「・・・普通、こう云う場合、少しずつ訓練とか試練とかを乗り越えて強くなるものだと思うのですが？」

「人はそうじゃな。じゃが、考えても見よ。そなたの世界における虎は、ライオンは訓練したから強いのかの？今のそなたも同じじゃ。

神竜として“存在する”ただそれだけで、この世に存在するありとあらゆる存在の中で最強なのじゃ。ま、（仮）じゃがな」

なんだか深いのか深くないのか分からない御高説を賜って電話は切

れた。

必要があれば携帯で連絡できるらしいから良いけど。

このことはスンに話すべきだろうか？このまま、黙っていても、肌を重ねることがなければ彼女の若返り効果は、お肌スベスベの強力版程度で収まる。

“ 僕、神竜になっちゃいました。で、エッチすれば若返るよ！  
テヘツ ”

キ、キモッ！・・・黙ってしよう！

「話しは終わったのか？では、さっさと行くぞ！」

声を掛けてきたのはスンだった。彼女には携帯電話の機能について話してあったから、誰かと連絡を取っていたことが分かっている。相手が神様だとは思っていないだろうけど。

改めてスンを見ると、やっぱり、綺麗だ。若返りの効果だけでなく、いや、そう知らされた後だからだろうか？前にも増して綺麗に見える。

スンの10代の頃とか、見てみたい気もするが・・・

スンがみんなに説明しておいてくれたおかげで、携帯電話は私の世界の魔道具であると理解されていた。それでもチャックさんとアリスさんは興味津津だったが、こちらの世界には、魔術師限定ではあるが念話の魔法もあるので、機能としては珍しいものではない。

まあ、これはアリスさんがちょっと負けず嫌いを発揮したということとで。

それにしても、スンの態度が冷たい。

恋人になつてくれなくてもかまわないから、もう少し普通の関係でありたいものだ。

三日間とはいえ、ツライ。美人さんの精神攻撃はきついですよ？

そう思いつつも、私の前を歩くスンの後ろ姿に、我が家での痴態が重なる。

歩くたびにお尻が・・・上だけパジャマで隠されていたお尻が・・・あ、ところで、スンの鎧はフルアーマーとは云わないらしい。胸部から腹部にかけてはショルダーカバー付きの金属装甲が覆っているが、腰から下は、何というか・・・昔流行った巻きスカート？に金属のプレートを張り付けている感じ？

その下にズボンを履いているが腿には装甲は無く、膝までの金属製のブーツ。肘から手首までは外側が金属プレート、内側は皮のようだ。

どれも内張りに皮が使用されていて、カチャカチャと不用意な音を立てない。

「おう！見えてきたぜ！あれが深奥の迷宮の出入り口だ！」

10 気が付けば最強のようです。(後書き)

ねむい・・・

## 11 馬車の旅はツライようです。

迷宮の長いトンネルを抜けるとそこは雪国だった。・・・いや、冗談抜きで。

聞いてないですよ。私、Gパンに厚手のシャツと、大学生の時に購入して以来、手放せなくなった黒のロングコートしか着てませんよ。積雪は10センチ程だけど、雪ですよ？家の方では数年に一度積めるかどうか。

「おや、おはようさん。今回の迷宮はどうじゃったね？」

出入口は、ほんとにトンネル状になっていて、100メートル程歩いて漸く外に出たが、そこには、軽装の鎧を着たお爺さんが槍を持つて立っていた。

こんなお年寄りで大丈夫なんだろうか？

お爺さんはギルドに雇われた見張り番だそうで、他に二人いて交代で此処にいるらしい。

「今回はちよつとしたトラブルがあつてなあ。食料が尽きたところで帰つて来たよ」

「そっぴゃあ、あんた方が潜つたのは5日も前だったかな。風の旅団も深奥の神魔獣には嫌われたか！？ふおおおお・・・」

えっと・・・此処にいます・・・神魔獣・・・なんか、ごめんなさい。

「まあ、そういうことにしておいてやるぜ。十分稼がせて貰ったしな。それより爺さん。俺達の馬車はどんな按配だい？プル達は元気か？」

「ああ、もちろんじゃ！大事に納屋で休んでいるさ。少し寂しがつて泣いておったが」

迷宮の入り口には大抵の場合、ギルドの派遣した番人がいるそうだがくまで見張りであつて、数年から数十年に一度、魔獣が溢れる現象、『狂騒』を監視するために、冒険者たちにサービスを提供するために居る訳ではない。

しかし、“個人的に”便宜を図り、その範囲で小銭を稼ぐことは禁止されていないので、ダークさん達「風の旅団」は馬と馬車を預けていたらしい。

見張りのお爺さんに見送られ、雪に足を取られながら近くの納屋に向かうと、チャックさんとグスタフさんが、さつさと巨大な馬車を引き出し、二頭の馬を馬車に繋いだ。馬は普通のサラブレッドに見えたが、プルと呼ばれる馬種らしい。明らかにサラブレッドなのに馬体が通常の1.5倍あり、道産子のように巨大だった。まあ、この位でないと、あの馬車は引けないだろうけど。

「ショウさん、乗ってください。これで取り敢えず森を抜けます。半日ほどでしょうか？そこからは転移魔法が使えますから、馬車ごとクブスリーの町に跳びます。今日はそこで一泊します。クブスリーの町も結構大きな町ですし、楽しめますよ」

私の旅には目的がない。強いて言うなら見て回るだけ。よつて、極力、護衛である彼らの都合に合わせることができるが、一応、賑やかな所に行きたいと希望はいつてある。

取り敢えずの目的地はやっぱり王都だが、彼らが迷宮で得た財宝はクブスリーの町のギルドでも換金できるので、王都に向かう必要はないのだ。

「じゃあ、クブスリーから王都に転移ですか？」

女性陣に続き馬車に乗り込みながらグスタフさんに尋ねると。

「いや、王都に転移魔法で近づくことは禁止されていますから。どうしても王都に行きたければクブスリーから馬車ですね。まあ、シヨウさんは雇い主ですから何処へなりとご案内しますが、たしか三日以内に此処にもどるのでは？クブスリーから王都までは馬車でも二日はかかりますよ」

ダメじゃん。

まあ、王都まで運んでもらって、後は一人でブラブラしても良いが、戻ってきててもアリスさんに転移魔法で『神魔獣の間』まで送ってもらわないと、我が家に帰れない。それまでに転移魔法をマスターする自信はないし、それに余りタイトなスケジュールはどうも好きになれない。世の中、何が起きるか分からないものなのだ。シミジミそれに、考えてみれば、スンを除いてみんなは五日間も迷宮に潜っていた分けだし、彼らにも少しはのんびりして貰いたいと思う。

チャックさんが御者台に上り、他のメンバーが馬車に収まると、さっそく動き出した。

思ったほど揺れないし、何より温かい。流石に匂いがキツイが、みんな気にしていないようだし、これが普通なのだろうと、空気を読んでおとなしく座席に座る。

座席の位置は、電車と同じで進行方向に向かって縦に並んでいる。入口は後部に一か所。

そこから見ると、左奥にスン、向かいが私、スンの隣がアリスさんでその向かいがダークさん、ダークさんの隣がグスタフさんとなっている。



「私たちを「風の旅団」と知って襲うような山賊はこの辺りには居ないと思いますが、念のためです」

なるほど、そう云われてみれば、私が一番安全な位置にいて、何かあればみんなが直ぐに跳び出せる位置取りとなっている。大きな荷物は天井や床下に収納されているらしく、車内は思ったほど狭くない。ダークさんの大盾は流石に天井に寄せられたが、各自の武器はみな手の届く範囲に置いてある。

しかし、私の正面がスンですか？その気も無いのに、にらめっこ状態。

二秒で私の負け！笑ったわけではないのに負けです。視線が痛すぎるので、あらぬ方向を見てしまふ。うう、気まずい。

こんな私でも、女性とお付き合いした経験はある。それも、自分では信じられないことだが、結構な美人さん達だった。スンには比べようもないが。腕を組んで町を歩く時、周りの視線が気になって仕方がなかったのを覚えている。

別れた理由は、大概「私の気持ちを分かってくれない」というもので、全てのケースで一方的に好かれて、一方的に別れを切り出された。

という分けて、今でも彼女達の気持ちはわからん。が、別れはツライ。だから、恋人になっても余り深く（精神的に）関わらなくなつた。悪循環か？

そんなことを考えながら馬車の旅は続く。小ぶりの窓も風が吹き込むのを避けるため、今は閉められている。降り積もった雪のお陰で、ゴトゴトとした振動は少ないが、それでも馬車の速度は随分抑えられているらしい。

グスタフさんが、これから行く町のことや王都のことギルドのシス

テムについて色々話してくれたが、彼らも疲れているだろうから、質問は控えた。

私は「気配りのできる大人」だから。

ギシっという軋みがあつて馬車が停止した。いつの間にか、私は睡魔に誘われてうつらうつらしていたらしい。寒い御者台でチャックさんが頑張っているのに最低だなあ。

周りにはアリスさん以外は誰もいなくて、私には毛布が掛けられていた。

「休憩よ。トイレは済ませておいて」

アリスさんがそっけなくいった。

「それから、毛布を掛けてくれたスンにお礼を云っておきなさいね。私はその必要があると思うのよ!？」

車内なのに、妙に冷たい風が吹いた・・・ような気がする。

## 12 仲直りするようです。

馬車道の脇に少し広くなった場所があり、その隅に粗末な小屋が建てられている。昔は誰かが住んでいたのだろうか？

どんよりとした雲が、今にも雪を降らせそうだ。まだ、森の中だが、木々も枯れ草も雪で覆われているお陰で、意外と視界は悪くない。

チャックさんは小屋に飛び込み用を足し、グスタフさんとダークさんはプルの所で何やら話し込んでいる。私はスンを探して森に入った。

スンは小屋の裏側の森に入ったところで剣を振っていた。白い息と剣が空気を裂く音だけが森に響く。

「スンさん、さっきは毛布をありがとう。お陰で風邪を引かずに済みました」

私が声を掛けると、スンは剣を振るのを止めて振り向いた。寒さの中で剣を振ったせいか頬が赤くなっているが、白と黒のコントラストの中で見るスンは本当に女神様のように美しかった。まあ、女神様って見たこと無いけど。今度、神様に聞いてみよう。

「どうして・・・」

「ん？」

「・・・どうして・・・。やっぱり、私のことなど唯の遊びだったのだな？」

「はい？」

私としては毛布のお礼方々、差し障りのない会話をして、それから“何か”でスンを怒らせてしまったことを謝ろうと思っていた。（

ちなみに、此処で理由を聞いてはいけない！)

私の数少ない恋愛経験からの教訓『彼女が不機嫌なときは、取り敢えず誠心誠意謝つとけ！』を実施する予定だったのだが・・・スンは・・・、そうだった・・・彼女は、「すんごい美人さん」なのに「男前さん」なんだった。

つまり、単刀直入？質実剛健？真実一路？

今までは、周りに人が居たから黙っていたらしい。

「確かに、会ったばかりのシユンと・・・その・・・“した”ことは、ハシタナイことだったかもしれないが、私は！私は・・・誰とでも・・・その・・・“する”ようなフシダラな女ではない！シユンにそんな風に思われていたなんて思うと・・・」

綺麗な顔が悔しそうに歪む。朱の指す顔は、寒さばかりが原因ではなかったみたいだ。

うむ、なかなか熱い告白？です。こう云う時、普通の男はどんな反応をするのだろう？

私の場合は、「萌え尽きたぜ！」の一言だった。

なに？この可愛い生き物は？

だが、ここで真っ白な灰になるわけにはいかない。断じて！

で、私は、雪の下に隠れていた石を急いで引つ張り出し、それをスンの足元に“よいしょ”と置いた。スンは私が何を始めたのか分からずぱかんと眺めていた。

石は、30センチ程でひっくり返すと実に都合よく平らで、私が乗るのに十分だった。

これで、目線が背の高いスンよりわずかに上になると、私は逃げられないようにスンの首筋から両の頬にかけて手でガッチリと固定して、少々強引に、ディープなキスをした。

「スンのことを、そんな風に思ったことは無い」

少し長いキスだったせいか、二人の吐く息は真っ白で、柄にもなくカッコつけた私の心臓が猛烈な抗議をしているのが分かる。

しかしだ、男には、自分の外見とか度外視してでも、カッコつけなきやいけないときがあるものなのさ！誰に云ってんだ？

「スンのことを、そんな風に思ったことは無い」

「・・・ホントに？・・・じゃあ、どうして・・・」

結論からいうと、全ては私の思い込みと説明不足。ほんと、ごめんなさい！

私はスンとのことを吊橋効果の結果と思い込み、スンが此方の世界に戻って、これで関係はリセットされると思っていた。そのことで戻ってきたスンが此方の世界で気まずい思い（だって彼氏とかいるかも？）をしないよう、仲間達にも内緒にした。

言訳だが、アリスさんが乱入したために、此処の所が説明不足だったのだ。

しかし、スンからすれば、体を許した男が異世界に来た途端に、自分に丁寧語で話し、“さん”付けで呼び、明らかに距離を取り始めたわけで、自分は都合のいい女でもう捨てられたのだと思い込むのに十分だったため、迷宮を出て以来、ずっと悩んでいたのだ。

あああもう、何というか。結局、もてない男が美人過ぎる彼女を持つてしまい、それが信じられなくて余計なことをあれこれ勝手に考えた結果、ただ純粹に愛してくれた恋人を、むやみに傷つけたと。そういうことらしい。

だれだ！そのドアホオは？・・・俺か？死ねばいいのに！

誤解が解けたところで、えっと・・・誠に遺憾ながら、エッチはできませんでした。

流石に、こんな寒いところでスンを裸にはできないし、この胸部装甲がじゃまなこと！

というわけで、今回は何度もキスをしながら、お尻を触りまくりました。

幸い、腹部からお尻の装甲は皮メインで巻きスカート系。つまり、簡単に手は入る。

うつつうむ、ズボンの上からだけだね。

でも、何度も堪能した引きしまった腰とお尻の弾力と曲線の、なんと心地よい事よ。

スンはちよつと困った顔をしながら、それでも応じてくれたが、その笑顔の破壊力は凄まじいものがあつた、とだけ云っておこう。

はぁ・・・私はつくづく“二の線”は向かないらしい。

しばらくして、私とスンは、手をつないで馬車に戻つた。

アリスさんは不機嫌そうに、チャックさんは目が点に、グスタフさんは笑顔で、ダークさんは左の眉をピクリとさせた。

めっさッ恥ずかしい！

さて、全てのわだかまりが解けて、改めて馬車を走らせる。今度はグスタフさんが御者台に上がった。

アリスさんの話しでは、こちらの世界に戻ってきてから、スンの様子がおかしいことは直ぐにみんなにバレタらしい。チャックさんを除いて。

私が原因であることは確實だが、男女の關係に疎いおっさんとガキはほつといて、アリスさんとグスタフさんが何気に気を回してくれタらしい。

感謝に堪えない。

こうして、私は・・・私たちの旅は、気まずさから解放された・・・  
筈だったのだが・・・いや、確かに・・・だが、この気まずさは・・・  
なんだ？

「シユン、寒くないか？もう少しこっちに・・・」

「シユン、このパトの実は、凍らせると美味しんだ」

「シユン、町にいたら・・・」

馬車の中で、ベタベタはしてないが、恋人繋ぎした手はそのままに、  
甲斐甲斐しく私の世話をするスンを、こめかみに青筋立てた美少女、  
生温かい視線のおっさん、キョトンとしてどうして良いのか分から  
ずオロオロするガキ、が見守る。

気まずい・・・

### 13 目的地に着いたようです。

それから暫くして森を抜けた所で、アリスさんが転送魔法を使って馬車ごとクブスリーの町の近くに転移した。

森を抜けた所で、驚いたのは、雪が無い事。迷宮の周辺は魔素の影響で天候さえ不順になり、極端な場合は真夏でも雪が降ることがあるそうだ。

今は冬だけど、何となく・・・すみません。

少しは走って小高い丘を越えると、遠くにクブスリーの町が見えていた。盆地のような地形に固まるように、大きな建物が幾つも見える。なかなか立派な町ようだ。

近づいてみると、馬車道は大きな防壁に向かって続いていた。ポツカリと開いた部分が門に成っているらしく、数人の兵隊らしき人が立っていた。

グスタフさんが彼らとの短い遣り取りをして、直ぐに中に入れてもらうことができた。

「あの。税金とか・・・？」

気に成っていたことを口にする。ほんの少しの旅だったが、私はみんなを、数少ない友達だと思っている。だからこそ、お金のことはしっかりしておきたい。

お金は怖いよ？私は友人同士の金の貸し借りは絶対にしない、どうしても貸すときは返ってこないものと考えている。

「ああ、此处では必要ないのだ。国内だからというのものもあるし、私たちが冒険者ということもあるが、クブスリーは自力生産力のない中継拠点だからというのが一番の理由らしい。人の出入りに制限を



すれば、あつという間に廃れてしまっからな」

あれから機嫌のなおったスンが、澄ました顔で説明してくれるが、スンの左手と私の右手は未だにガツチリ恋人繋ぎ。離してくれません。ちよつとでも離そうとすると、途端に悲しそうな顔をするから、どうしようもありません。

表情と言動が合っていないよ？

鬱陶しいか？ぜんぜん！むしろその顔が見たくてときどきやってますけど、なにか？

思い出して頂きたい。私は微Sだ。

「このままギルドに向かいますよ。今回はちよつと荷物が多いですからね」

「そうだな。がはははは！」

「シヨウさんのも此処で換金したら？無一文って落ち着かないですよ？」

と云う分けて、幾つもの町並みを超えて、やってきました冒険者ギルド。

レンガ造りの立派な建物だった。町で一番立派なんじゃないだろうか？と思っていたら、なんでも、此処に町があるのはギルドが此処にあるからで、町の名の由来も、ここの初代ギルドマスターの名前をそのまま付けたとのこと。

200年前、人が集まり、町ができると、領主がこのこやってきて他より高い課税をしようとしたところ「んじゃ移転する」の一言で撤回させたという剛の者だったとか。

扉を開けると予想通りの作りであることが分かった。広いロビーに幾つかの椅子。カウンターに座る綺麗なお嬢さん達と、そうでないお嬢さん達。（差別はいけない）

窓口の幾つかでは換金や依頼の授受といった交渉が行われているようだった。

ダークさんを先頭にズンズン進むと、ロビーにいた冒険者たちが噂話をしながら此方を見る。視線は二つ。ダークさんの担いだでつかい袋と、私の手を引つ張るスンだ。

私は恥ずかしさで悶死しそうだ。

ちなみに、私達三人以外は馬車で待機中。

「あら、おかえりなさい。ダークさん。今日は換金ですよね？」

「おう！よろしくたのまあ！・・・あ、それと、こいつの登録も。

換金の方は時間が掛るだろうから、明日の昼にでも引き取りに来るから、それまでに頼む」

「畏まりました」

キュピーン！

その昔、どこかの賢者が云ったそうだ『リアルねこ耳を知らずしてねこ耳を語るなかれ』と・・・けだし、名言である。

そして今ここに、リアルねこ耳が・・・iiiiiiiiかん！厨二病が再発しそうだ。

私は分別を弁えた大人だから、彼女の耳をガン見することはなかったが、ふとした時にピクリと方向を変えるモフモフの耳は確認した。尻尾は未確認だが・・・

間違いぬあい！

「では、そちらの方？登録の手続きをしますから、此方の用紙に必要事項を記入してください」

「は、はい。・・・あ、でも字が・・・」

「心配ない。私が書こう」

「ありがとう。スン」

スンが用紙を受け取り、適当に記入していく。

何が書かれているのか分からないが、途中でスンに尋ねられたのは年齢だけで「33歳」と普通に答えたら、スンとねこ耳受付嬢に引かれた。

スンは自分と同じか若しくは下だと思っていたらしい。

「あ、はい、シュン・ムラカミ様ですね。それでは最後に、このカードに血を垂らしてください。それで登録は終了です」

スンが前に見せてくれた銀色のカードと同じものを渡された。違いは、何も記入されていないまっさらであること。  
ねこ耳のお嬢さんに云われた通り、指先をちよつとだけ斬って血を垂らす。（よかった。まだ血は出る見たい）血液は、銀色のカードに吸い込まれるように消えていき、代わりに幾つかの文字が浮かび上がった。

このカードは云ってみれば究極の身分証明書になる。良く分からないが、DNA情報でも読み取っているのか？本人以外では情報の表示も不可。当然、偽造もできないそうだ。

さらに、受けた依頼の数、その達成率、その難易度などから、その冒険者のランクを自動記録するらしい。あつちの世界より進んでない？

残念なことに、私には文字も数字も分からない。

「スン。なんて書いてあるの？」

「えっと・・・名前、生年月日、種族、性別、ランク（F）、職種

（無し）、経験年数（0）、

討伐記録<sup>なし</sup>、賞罰<sup>なし</sup>こんなところか・・・ん？」

幸い、種族とかに神竜とか、職業に守護者とか自宅警備員とは表示されなかったみたいだ。ちなみに職業とは、剣士とか魔術師とかのことらしい。なんでも、経験を重ねるうちに、最も適正のある職業が表示されるようになるのだとか。

いずれにしても、いきなり変に高レベルとか表示され、悪目立ちするのは、御容赦願いたいところだ。

ほっと一安心、基本は人畜無害な旅行者でお願いします。普通が一番。

流石は神様、良く分かっていらっしやる。

「シヨウ。体内魔素レベルが『 』 なんだが、これはどう意味なんだろうな？」

「・・・」

神様のあほ  
- - - - -  
o r z  
- - - - -

### 13 目的地に着いたようです。(後書き)

いやあ・・・私が書きたいのはエッチと無双なんだが・・・  
なかなか、無双まで行かなくて・・・

全体を短くして、強引に無双に持っていこうかと・・・でもなあ・・・

## 14 小金持ちになったようです。

残念ながら至近距離でリアルねこ耳を愛でるより、スンを連れてカウンターを離れることを優先せざるを得ない状況になってしまった。幸いなことに、こちらの世界には『』の記号が無く、カードのエラーではないかと云われたが・・・無いなら表示すんなよ！なに？この無駄な高性能？

ことの真偽はさておき、ねこ耳受付嬢に失礼にならない程度にお礼をいってから、素早くカウンターを離れた私たち。怪訝な顔をするスンに「後で」と云い含めて口を封じた。どう説明するかなんて決めてませんがね！

次に向かったのはお宝の買い取りカウンター。

前例のない物なのでいくらになるか？まずは、私の持ち込んだコンビン鏡（小）。

ロマンスグレーの髪に手入れされた口髭の「鑑定士」のおじさんが唸り始めた。

鏡の表面を覗き込み、裏返し、青いプラスチックを突つつき、改めて、手袋を取り出してもう一度。表面についた指紋を綺麗に布でふき取ると、腕を組んで真つ赤な顔で、また、唸りだした。

「これを・・・どちらで？」

「深奥の迷宮の最下層域で」

嘘は云っていない。私は正直に答えた。深奥の迷宮の最下層域のさらに先の、“私んち”から持ってきたものだから・・・

「あそこで、このような物が・・・うううん」

結局、金貨4枚と銀貨100枚を受け取った。おじさん曰く、間違はなく金貨10枚前後の価値があるが、正直なところ正確な金額が分からない、よって妥協案としてギルド主催のオークションに出品して、その一割をギルドの手数料とし、残額を私に支払う、ということになった。

金貨4枚銀貨100枚は、鑑定歴30年の誇りに賭けて“先払い”だそうだが、それでも、ざっと500万円相当の収入になるから、私に異論はなかった。

ちなみに、支払いは何処のギルドでもカウンターでギルドカードを提示すれば、引き出しができるようにしておく、とのことだったが、小さな革袋に金貨と銀貨を詰めて渡され、私はホクホク顔でギルドを後にした。

残念なのは「鑑定士」だけに“例の名台詞が！”とちょっと期待したんだけどなあ・・・  
何か似ていたし？無理か？

ギルドの外に出ると、もう町に夕闇が迫っていた。  
何処から、酔っ払いが騒ぐ声が聞こえて来るなか、ダークさんが馬車の前で待っていた。

少し待たせたようなので、断りを入れてから馬車に乗り込むと、アリスさんが興味津々でギルドでの成果を聞いたがった。

「じゃあ、今日はシユンの奢りで大宴会ね！？」

奢りますよお、今日のおじさんは、ちょっと違うよお！

と、思ったが今日は疲れているので、明日にしてほしいと断った。  
馬車の窓から流れる町並みは、あちらの世界に比べるべくもなく薄暗いが、それぞれの窓の明かりは何故か、とても暖かそうに感じた。

馬車は通りを少し進んで右手に曲がると、暫く進んで留まった。

「着いたな。『春の風花亭』ここが今日の宿だ。食いもと、酒がうまい」

ダークさんがそう云って紹介したのは、ギルドと同じレンガ造りの3階建ての建物。

建物自体はギルドより小さいが、小奇麗な白い柱が印象的だ。

玄関前のランプには既に明りが灯っていて、恐らく、向こうの世界でもこんなホテルがあればきっと人気がでるだろうと思わせるものがあつた。

ちよつと重めのドアを押し開けると、そこはホールになっていて、幾つものテーブルと椅子があり、既に何組もの人が料理を囲んで歓談していた。中にはスンのような女性冒険者もいるようだが、男性客に大酒を飲んで騒いでいる者はいないようだった。

「ここは町一番の宿で、女性冒険者御用達の宿でもある」

スンの説明によれば、やはり女性が安心して泊まれる宿は少なく、こう云った宿は貴重なのだそうだ。かといって、女性冒険者にスンやアリスさんのような高ランク冒険者は少ないので、値段も控えめで赤字すれすれ。

それでも経営が成り立つのは、実は女性冒険者保護のためにギルドが経営に参加しているからだとか。

よつて“紳士”と認められないような客は、ただちに放り出されて、以後出入り禁止を食らうので、みんなハメを外すようなマネはしないのだ。

入口を入れて直ぐの所に受付があり、カードを提示して部屋を割り



振る。

ダークさん以下3人は二人部屋に簡易ベッドを持ち込んで1部屋に、スンとアリスさんが二人で1部屋、私は三階の角部屋を一人で使うことになった。

なんせ、“お金持ち”なもんで！

グスタフさんとチャックさんは馬車を預けるため、一旦、宿を出たが、私たちは荷物を抱えてそれぞれの部屋に向かう。この後、すぐに、食事だ。

ところでダークさん、あなたの荷物はその紙袋だけですか？

確かに食事はうまかった。食材が何なのか分からないのが不安だが、食事にラーメンが出てくるかもと心配していたが、流石にそれはなく、普通の食事をみんなと一緒に食べた。酒も出たが、酒量は兎も角、悪い飲み方をする者はなく、迷宮探査の成功？と新しい出会いに6人で乾杯した。

ちなみに、チャックさん！酒は二十歳を過ぎてから！

食事が終わり、今後の予定について話し合ったが、時間的に、やはり王都はムリ、ということ、クブスリーの町でのんびり過ごすことにした。

さつそく、その場で、全員分の二日分の宿代を支払って、ささやかな宴は終了となった。

もちろん、ダークさんとグスタフさんはもう少し飲んでからということだったが、こちらの世界では夜の楽しみといったら、飲むか、打つか、買うか、しかない。

チャックさんがどうするのか、については聞かないでおこうと思う。

さて、私は当然、だれからも誘われなかったもので、一人で部屋に戻った。

私の部屋は、一番良い部屋の一つらしい。濃いグレーのカーペットがシックだが、流石に明かりは洒落たランプが三つだけで薄暗い。しかし、部屋の中にあるソファ―セットにはお酒が用意されていて、チーズのような摘みまであった。

ベッドはキングサイズのふかふかで満足できるものだったし、続きの間か？と思ったなら、全く期待していなかったお風呂まであった。これが贅沢というものか？

まあ、魔道具式らしいので、使い方がわからんが。

荷物を整理して・・・といってもリュックだけなので、空のクロ―ゼットに放り込むだけで片づいてしまった。

やることも無くなって、手持無沙汰にお酒を少し飲んでいたら、ノックの音。

「シユン。起きてる？入ってもいい？」

## 15 太陽が黄色いようです。

私の携帯電話の時計は、現在1月1日午後9時15分。

実は、お正月の夜なのだが、いろいろあつて忘れていた。まあ、此方とあちらの時間軸が異なるだろうことは覚悟していたので、私的にはお正月でも、此方はありふれた日常の一日に過ぎない。

しかあゝし！私は拘りたい。断固として！此方の世界ではお正月らしいことが、何一つ出来ないことは分かったが、唯一つ、たった一つだけ、出来ることがある。

はい、そのあなた（だれ？）正解ですよ！

そう！それは、我が国古来より連綿と続き、決して一人ではできない神聖かつ欠くべからざるところの“姫始め”という伝統儀式だあああ！

はあはあ・・・

そのために夕食の宴会を早めに済ませるよう根回（日本人ですから？）し、食後の別れ際に、スンに視線でサインを送り、荷物を片付け、ベッドにも入らずに彼女を待ち侘びていたわけば・・・じゃなくて“よ”お客さん。（だからだれ？）

と云う分けて、スンが部屋にやって来た時、私は直ぐにスンをベッドに押し倒した。

その時、彼女が私のプレゼントした夏用パジャマを着ていたこととか、枕を抱えていた姿に異常に萌えたとか、ノックの後の声が既に女の子言葉だったとか、私の頭はいろいろすごい事になってしまっていた。

所謂、野獣状態。

とつてもお高い部屋で、ちよつと余裕を持つて彼女を迎え入れ、お酒を少し飲んで、摘みを口にし、楽しい会話で盛り上げて・・・知るかあああ！

スンは可愛い、すごい美人で、すごく健気で、なにより、私なんかを好きだと云つてくれる最高の彼女なんだ。

一気に押し倒す以外に何をするって？バゝカ！バゝカ！

・・・・・・・・都合により一部削除・・・・・・・・

それでも忌々しいことに朝はやってくる。

私は神竜の体を持つために、体力が異常に増強されているらしい。その私にスンを付き合わせるのは無謀かもしれない。ついさっきまで嬌声を上げていたスンは、キングサイズのベッドの上で、うつ伏せの状態のまま力尽きたように眠っている。

風邪を引かないよう、美しい裸体をシーツで包みながら、男の悲しい性だろうか、スンが満足してくれたか？喜んでくれているか？とても気になった。

これが、賢者モードというやつか？

それから、昨晚、自分がやらかした何から何までもが、恥ずかしくなってきた。

夜が早い分、異世界の朝は早い。まだ薄暗いのに、窓の隙間から見える町の通りには既に人の姿があった。

私は、外が明るくなり始めるとスンが部屋に戻りづらくなることを思い出して、断腸の思いでスンを起こすことにした。また、「あと5年」とか云いださなければ良いが・・・

「スン、起きて。朝だよ。早く自分の部屋に戻らないと、まずいんじゃない？」

「ん、ん〜ん……おはようシュン」

薄く眼を開けて気だるげにスンが朝の挨拶をする。

駄目だから……そういうの。可愛すぎる。しかし、ぐっと我慢する。

そして、スンがシーツを巻き付けたままベッドに起き上がり、目を擦りながら此方を向く。

空気を入れ替えようと少しだけ開けておいた部屋の窓から、ちょうど朝日が差し込んできてスンの顔を照らす……て、えッ？

しまったあああああ！

私は慌ててスンをベッドから抱き上げると、小さな悲鳴を上げるスンを無視して、ベッドの脇に立たせる。そして、巻き付けていたシートも剥ぎとると、スンが明るくなつた部屋で恥ずかしがるのも無視して“気お付け”の姿勢を取らせた。顔が真っ赤。

それから、近くによつたり、離れてみたり、後ろから、前から、何度も確認した。

スンはその間、恥ずかしそうにしていたが、だが、私の様子がおかしいことに気が付いて、怪訝な表情を見せた。

若返っている！

もう、“お肌スベスベの強力版”では済まされない。

もともとスンは若々しくて、綺麗だし、可愛いが、それでも年齢に見合った美しさであり、成長が止まったような美しさではなかった。そつという人は最初から『永遠の美少女』とか表現するべきだろう。

そして、その場合、その人が実際に歳をとると、大概、何処かに不自然な違和感を生むものなのだ。

だが、今のスンはどう見ても、青春真っ盛りの10代に“しか”見えない。

やってしまった・・・

すっかり、自分の能力を忘れていた。でも、今回も、コンちゃんは使用したのに。

ああああ！・・・この場合、避妊だけじゃ駄目なんじゃ？

もしか・・・しなくても・・・“あれ”が原因だな。

15 太陽が黄色いようです。(後書き)

エッチが止まらない

エッチ過ぎたみたいです(11/21)



## 16 屁理屈全開のようです。

朝日が完全に顔を出すころ、私はスンに直ぐ部屋に戻って着替えてから、もう一度私の部屋にくるように云った。

スンには、私のリュックサックから鏡（大）を取り出して、自分の状況を理解してもらった。まあ、暫くは、鏡を見つめ頬に手を当ててニコニコしていたが・・・女の子だねえ・・・

暫くして、遅いなあと思った頃、ノックの音がしてスンが戻って来た。

ただし、アリスさんを連れて。

こつそり部屋に戻ったが、その時は既にアリスさんが起きていて、予想通り、一発で若返りに気が付かれ、強引に同行を求められたそう。

「何をしたのよ？ シュンさん」

「いえ・・・あの・・・ナニをしただけです・・・けど」

私の言葉にビシッという擬音つきで、アリスさんの表情がきつくなる。実際のところ、少し激しかったかもしれないが、ナニをしたただけで・・・はい！ すみません。

私達は正座させられ・・・床はカーペットを敷いただけで・・・あれ？ デジャブ？

だが、本当のことは云えない。神様との約束があるから。だから、スンが部屋に戻っている間に、考えを整理して辻褃の合う言訳を考えた。

実は私、こういうの得意なんです。昔そいう仕事してたから。簡単に云えば、起きてしまった現実に整合性の付く原因と理由を後

付けし、今後について納得のいく方向性を示す。決して真実ではないが、かといって嘘でもない。

そして、嘘と証明することは誰にもできない。で、後は、ひたすら謝り倒す。

大人ってきたないよねえ・・・

と云う分けて、私の屁理屈は次のようになった。

まったく理由は分からない。しかし、推測に過ぎないが、私が異世界人であることに大きな原因があるのではないか？私のいた世界と此方の世界の人間は、全く同じに見えるが、そもそも、向こう側の世界には、魔法やその素になる魔素は存在しない。

もし、存在すれば、向こう側の科学技術で検出されないはずはない。確かに、歴史的には魔女が居たとされるが、それは当時の宗教的な云いがかかりに過ぎないことが確認されている。考えられるのは、私がこの世界に入り込んだ時に、魔素を体内に取り込んでしまったのではないか？ということ。

その結果、もともと空っぽだった私の体が大量の魔素を吸収、蓄積したうえ“体液の交換”によって、魔素がスンの体に入り込み、更に活性化された結果、若がえりが起きた。というものだった。

へえええ・・・そうなんだああ・・・

まあ、どれもこれも推測とこじつけで、要するに、異世界人の不思議パワーということになるのだが、真偽の程は、少なくとも今は確認できないので良しとしよう。

それから、私のギルドカードの体内魔素レベル『』が、彼女達には意味が分からなくても、見たこともない記号であることから、この出鱈目に信憑性を与えた。

「スン。あなたはどうなの？体に異常はない？」

「いや？むしろ以前より体が軽くなったような気はするが、これといって異常はないな」

「悪いけど、そのベッドに・・・いえ、ソファアに横になって頂戴。私は治療術師じゃないけど、少しだけ調べさせてほしいの。見る限り、大丈夫だとは思うけど」

「ああ、構わない。やってくれ」

言訳を考えるのに必死だった私は、汗と体液とで汚れたベッドを整えることを忘れていたので、仕方なくスンはソファアの長椅子に横になった。（そこでもしましたが・・・）

ちなみに、今のスンはちゃんと服を着ているが、装甲は付けていない。

アリスは、暫くの間、スンの体に手をかざして目を閉じていたが、やがて眼を開けると呟いた。

「異常なし・・・ね。体内魔素にも生命力にも異常なしよ。むしろが強くなっているみたいね。驚いたわ・・・魔法を使って若返ることとはできないことではないけど、その場合、急激な体内魔素の減少で衰弱するか、最悪、死んでしまうことだってあるのに・・・」

「へえ、魔法で若返ることってできるですかあ・・・」

「何度も云わせないで！出来ることはできるけど、其れをすれば殆ど死ぬか寝たきりの状態になるのよ」

「でも、スンには問題ない・・・？」

そこが一番重要だ。

まあ、神様によると私の血肉は若返りの霊薬になるらしいから、害があるとは思えないが、恋人の体を心配するのは、ある意味、私にとって、権利であり、義務でもある。

まして、スンを今更失うことは私には耐えられないことだ。  
もちろん、スンに問題は無い、とうことだった。

「じゃ、次。シュンさん、あなたの番よ」

「へ？」

「異世界人にそんな能力があつたとして、急激に吸収された魔素が、あなたの中でどうなっているのか気にならない？そもそも、体外魔素は魔術師がその体内魔素でコントロールすることで、大きな力を得るものなのよ？それを、一時的に体内に吸収するだけならともかく、完全に蓄積して活性化させるなんて、普通ありえないことなの」

と云う分けて、アリスさんに体を調べられました。

結論から云えば『解らない』だった。治療師が使用する診断魔法が、私の体内に吸い込まれて反応しなくなるそうだ。

うううん、私の体にはレーザー波吸収塗料（魔法版）でも塗つてあるのだろうか？

スンは少しだけ心配そうな顔をしたが、兎に角、私は気にしない。  
大丈夫なのは知っているから。

「さてと・・・じゃあ、私、他のみんなを呼んでくるわ」

まあ、ここにきてメンバーに隠すのは不可能だし、私が異世界人であるという秘密を守るためにも、メンバーには事情を説明しておく必要があるだろう。

そして、宿のロビー辺りで初めて顔を合わせて驚かせるよりは、今のうちに私の部屋で驚いてもらおう、ということになった。

結果、思ったほどの混乱は起きなかった。

ダークさんは“どっか変わったのか？”で終わったし、グスタフさんは“なるほど”だったし・・・唯一、変わった反応を示したのは

チャックさんだろうか、もつとも、“驚く”という反応ではなかったが・・・チャックさんは、スンを見るなり、ソバカスの散った顔を赤らめて、明らかにモジモジした。

おじさんには分かるぞ、少年！

昨日までの“姐さん”が、どう見ても自分と同年か、ちょっと下位の美少女に大変身したのだからな。今のスンは君ぐらいの男子が、一番意識する年齢の女の子だものな！

だが、云っておく。

あげないよ？

ていうか、ちよっかい出したら殺すよ？

決して負けられない戦いがここにある！！！！

16 屁理屈全開のようです。(後書き)

なんか、読んでくれる人が急に増えました。  
ありがとうございます。

## 17 昔話をするようです。

スンと男子諸君との顔合わせが済み、幾つかの打ち合わせを行った後、メンバー公認（肉体関係含む）の仲となった私たちは、スンが私の部屋に引っ越すことになった。

何処となくうれしそうに荷物を運ぶスンを見て、何とも云えないうれしさが込み上げたのは、昔、同棲していた彼女が、私の暮していたアパートに初めてやって来たときと同じ感覚だったかもしれない。あの頃は、若かったなあ・・・

私はソファアに座ってぼんやりスンを眺めていたのだが、そもそもスンの荷物といっても大したものはない。大きな荷物の中身は着替えの服と、私には良く分からない細々とした品々。女性だからね。一番の大物はやはり、甲冑と長剣だった。

スンは剣士としてはBランクにあつて、女性としてはかなり珍しい部類らしい。

もうすぐAランクに上がるらしいが、殆どの女性冒険者は魔術師か斥候のような体力と云うよりは技術職が多く、殆どが最終的にBランクになるかどうかで引退するらしい。体力的には仕方がないのだとか。

しかし、類まれな才能のあつたスンはもうすぐAランクに昇格する。

「私は剣を握ったのが随分遅くてな。それから、幾人かの良い師匠に出会えたお陰で此処まで強くなることができた。それに、今のメンバーにも感謝している。今のメンバーとはもう3年になるが、冒険者として独り立ちできるまでになったのは、間違いなくみんなのお陰だと思っている」

人の強さと、ギルドランクの高さとは必ずしも一致しない。

実際、王宮騎士団の団長クラスになれば、ギルドに所属していなくてもAクラスか、或いはそれ以上の実力を持っていると云われている。しかし、その強さは冒険者としてのそれではなく、職業柄、対人戦闘に特化している。

無論、王命による魔獣討伐もあるから、魔獣に対して無力という分ではないが、経験の差はどうしようもない。

結局、それ程の強さがあっても冒険者として大成するかどうかとは別物なのだ。

「私は運が良かった。なにせ、『鉄壁のダーク』に『鷹の目グスタフ』の二人に出会えたのだからな」

なんででしょうか？その厨二病的なお名前は？

ちよつとだけ、聞いてはいましたが、グスタフさんにも二つ名があったんですね？

ダークさんはある魔獣討伐において、超重量級の一撃を例の大盾をもって受け止めて見せたことから付けられ、グスタフさんは広範囲に毒霧を振り撒くことで、だれも近寄れなかった魔獣を、超遠距離射撃で仕留めたことで名付けられたらしい。

「二人ともとうの昔にAクラス入りしている。多分、Sクラスも夢ではない」

Sクラス。

世に多くの冒険者があれど、Aクラスになれるのは1000人に一人と云われ、そのAクラスの1000人に一人がSクラスに至る。冒険者にとつての遥かな頂き。

そして誰もが一度は挑み、そして諦める至高の存在。

だからこそ、現役のSクラス冒険者は大陸に7人だけ。



「その人たちって、何してSクラスになったの？」

「何でも、神魔獣を倒したパーティーのリーダーだったらしい」

「ゼロゼロ」

「？」

スンやみんなは、そんなことしないうけど、私が神魔獣（守護者）だってばれたら超やばくない？

「いや、何でもない。じゃあ、もしかしてみんなが『深奥の迷宮』に潜ったのって、神魔獣を倒すことが目的だった・・・とか？」

「まあ・・・しかし、ダークが望んでいる分けではないし、迷宮探索で無理はできない。パーティーとしてはAクラス二人に、実力的にはAクラスのアリスと、Bクラスの私に、Cクラスのチャック。十分勝算が望めるメンバーではあるが・・・後は運だな」

云われてみれば、確かに豪華なメンバーだ。

「もつとも、今まで一度も討伐されたことのない『深奥の守護者』に勝てるかどうかは、流石に分からないから、今回は、まあ、様子見だな」

・・・いえ、多分、楽勝かと・・・

ていうか、『深奥の守護者』ってなに？また、ややこしい名前付けちゃって。

それって私の前任者のことだよな？私じゃないよね？

違うと云って！

「どうしてスンは剣を握るのが遅かったの？」

「・・・私は、・・・私は、ある王家に剣を持って仕える一族の出

だ。本来は直ぐにでも剣術を仕込まれる筈だった。しかし、お爺様が亡くなり、父が家を継ぐようになると、父は家名に胡坐をかいて権勢に走った。私はそのための道具だから剣を学ぶ必要はない。実際、直ぐに婚約者をあてがわれたからな」

私は、慌てて、辛いなら話さなくても良いと云ったが、スンは話したいといった。

「私には父を非難することはできん。その当時16歳だった私は、それが当然だと思っていたし、婚約者の男は家柄も見えてくれも良かったし・・・私は・・・その男に身も心も捧げたのだ」

スンは目を閉じて、折り畳む途中の服を握り締めていた。

「だが、父に政治の才能など無かったのだ。すぐに罠に嵌められ失脚。家は没落して父は母と共に命を絶った。私は何も知らず、婚約者に囲われて過ごしていたが、父が失脚すると直ぐに殺されかけた。と云うより、その男も父を罠に嵌めた一派だった訳だが」

それからなんとか逃げ出した所を、家に仕えていた家臣が国外に逃がしてくれ、各地を放浪しつつ、剣を学んだのだそうだ。ただし、ただの冒険者として、あくまで生き延びる糧として。

私は、付きあつた女性の過去を尋ねたことがない。

過去は変えられないし、過去も含めて今のその人を作っていると思うからだ。今のその人を愛しているのなら、聞く必要のないことだと思う。

だが、勿論、聞いて欲しいと云われて、聞きたくないと耳を塞ぐこともない。

スンにとっては、話すことが必要だったのだろう。

一つのけじめ・・・

「シュン。私は・・・私の初めてをシュンに捧げられなくて、すまないと思う」

私は黙って、泣きべそをかいているスンを抱きしめた。

## 18 町を散策するようです。

暫くして、私はスンを町に連れ出した。若返りがどうか、私の素性がどうか、どうでも良かった。宿のカウンターで一番の服屋を尋ねてから、手を繋いだまま宿を飛び出すと、一目散に服屋に飛び込み“この子に似合うとびきりの服を”と注文した。

服屋のおかみさんは、ちよっと驚いた顔をしたが、直ぐに可愛い服や靴、小物まで、店じゅうを引っかき回し、更に、私の趣味のデザインを幾つか出してくれた。

私に服のセンスを求めてはいけない。  
私に任せるとこうなる。

時間は掛ったが、白いフード付きのハーフコートに、紺のセーター、赤いチェックのミニスカート、白のニーハイ、茶色の編み上げハーフブーツ。

ん？JK？知らんがな。

スンは足を出すのをとても恥ずかしがっていたが、出来上がった姿を店のおかみさんに見てもらいOKを貰った。

少し、奇抜ではあるものの「若いんだから冒険しなくちゃ！」と云われたスンは、何か言いたげだったが、ここは“無視”が正解。

銀貨20枚を支払い、店を出ると、スンは私の陰に隠れるように寄り添った。

その頃になると、もう昼が近く、公園近くまで来た私たちは、目に付いたレストランらしき店に入り、食事を頼んだ。

偶然とび込んだにしては、なかなか良いレストランだったようだ。清潔なテーブルクロスに薄いピンク色の花（恐らく造花）が活けられていて、ウェイターの態度も悪くない。

食事の間中、私はスンの着る服が、あちら側でどんな女の子がきるのか？他のファッションにはどんなものがあるのか？とか、詳しくもないのに、兎に角、話し続けた。

デートで嫌われるパターンだということは、重々承知の上で。不思議と、周りの視線は気にならなかった。

食事の後は、手を繋いでぶらぶらと町を歩いた。

相変わらずスンは私の陰に隠れようとするが、武器屋と鍛冶屋には自ら入ろうとするので困った。ちなみに、スンの服装で長剣を腰に差すのは余りに味気ないので、私の右腰に提げ、スンが右手で何時でも抜けるようにした。

左腰には私がスンから借りたショートソードが差してある。コートで隠れて殆ど分らないと思うけど。

「足がスースーして落ち着かないのだ」

スンはずっとそんなことを云って、しきりにスカートの裾を下に引っ張るのが、ミニスカートよりハーフコートの方が、少しだけ丈が長い。

結果、絶対領域はコートに隠れてしまふのだが・・・私の良心が咎めたが、ここは我慢して貰おう。

それに、スンの表情が随分明るくなったような気がしたので、私は満足してる。

いつの間にか町を一周したらしく、公園に戻ってきていた。

私は、公園のベンチに腰掛け、スンを横に座らせてから、剣を鞘ごと抱きかかえ、スンが抵抗する暇も与えず、ゴロンと横になった。

男のロマン初級編であるところの膝枕である。

まあ、膝枕の場合ニーハイが邪魔なのだが、足の長いスンなら十分

生足を堪能できる。

「シュ、シュン！」

スンは驚いたように私の頭を抑えるが、この体制になってしまえばどうにもできまい。

スンは周りを見渡して赤面しているが、当然、無視。

ということ、後頭部で生足を堪能しながら上を見上げると、セーターの巨大な膨らみの向こうで、スンが困った顔をしている。微笑万歳！

スンが諦めたように、私の頬や耳をいたずらし始めた頃に、唐突に横向きになり、今度は頬で生足を堪能する。

無論、私のお顔はスンのお腹の方を向いている。そのままグイグイとお腹の方に近づいて行くようにしながら頬でスリスリ。

「シュン、あのな、シュン・・・」

何故か必死に私の頭を遠ざけようと、両手で押さえるスンが、今までになく、困った声で話しかけて来るので、ちよつと見上げてみると、スンが私に屈みこんでくるようにして口元を耳に寄せた。ムグ！胸で顔が・・・幸せ。

「シュン、忘れていないか？私は、その・・・穿いていないのだが・・・」  
「あ」

此方の世界には常に下着を付けるという習慣がないそうだ。

無論、下穿き自体は存在するが、それは所謂、女の子の日に身に着けるものだとか。

考えてみれば、ヨーロッパでも下着文化は中世後半から漸く定着し

始め、日本では、近代でも下着文化は大幅に遅れていたそうだ。確か、デパート火災かなにかで、それが原因で多くの女性が亡くなつてから、爆発的に広がったのではなかったか？

いずれにしても、私は微SどころかドSの羞恥プレイをスンに強要していたことになる。

だが・・・やってしまったものは仕方がない。

それに、今、とても気持ちがいいし・・・当初の目的、スンを“元気づける”を忘れた私は更に暴走することにした。  
うむ！確信犯である！

「まっいつか！」

と、そのままの姿勢でスンに云った。

・・・・・・自主規制・・・・・・

そして、夕食まで部屋に籠った。

何をしていたかは、想像に任せる。

それより、スンに下着をプレゼントしなければ・・・今日は特別としても、女性は下半身を冷やしてはいけならしい。

向こうで買ってくるか？30過ぎのおっさんが女性用の下着を？  
むりむりむりむりむり・・・絶対むり！

いっそ、スンを向こうに連れて行って・・・あ、今のスンは・・・  
駄目だ・・・  
フツ・・・確実に捕まるな。



## 19 見られていたようです。

私達の宿屋「春の風花亭」では、スンの若返りが評判に・・・は成らなかった。

冷静に考えてみれば、昨夜のスンと今のスンを同一人物と見るよりは、身内、具体的には良く似た姉妹の方が納得しやすい。

まして、私がスンを連れ出した時を除いて、戻って来た時は完全に少女の装いであつたため、口を開かなければ同一人物と見られる恐れは殆どなかったのだ。

「打ち合わせと随分違うようですが、それにしても、無茶をしましたね」

笑顔でそう云つたのは夕食の時のグスタフさんだった。

グスタフさんによると、スンの若返りを誤魔化すことはできたし、気付かれる恐れの高い宿のスタッフも姉妹と誤認しているが、昼間の行動は、逆に、街中で非常に目立っていたらしい。覚悟はしていたが・・・

黒髪黒目で黒のロングコートをまとった風采の上がない小男が、超絶美少女と手を繋いで町を練り歩いた訳だから・・・て、あれ？なんで知ってるの？

「お忘れですか？私たちはあなたの護衛なんですよ？」

そうでした。

と云うことは・・・

「公衆の面前で随分大胆なことをなさるのですね？あれが異世界流ですか？」

「・・・だ、だから止めてくれと、何度も云ったのだ」

「あらそう？それにしては随分と楽しそうだったじゃない？服なんか買ってもらって」

こう云う場合、ダークさんは首を傾げ“何の話しだ？”状態で、チャックさんはモジモジして会話に入ってこられない。

夕食も二人で食べたかったが、宿賃に夕食代が含まれるし、時間帯が同じなので結局みんなと顔を合わせることになる。その結果が現状。

ちなみに、スンは着替えた。流石にノーパンと分かっているあのミニは無いわああ！

外側は兎も角「お宝」は、私にだけ見せてくれればよいのです！

「ま、良いわ。スンを大事にしてくれるなら」

「そこは同意できますね。問題はこれからですが、さて・・・」

「いつそのこと、暫く町を離れるのも手よね？」

「ええ。今日一日だけとはいえ、それでも二人に注目していた連中もいましたからね」

「それは私も気が付いていた。嫌な視線だったが、近づいてこなかったからな」

「覗きではないみたいでしたが・・・寧ろ、その方が安心なんですよがね」

私は全く気が付かなかったが、そうだったらしい。

グスタフさんによれば、此方の世界では美しい娘の誘拐は珍しくなく、行先はお決まりの奴隷商人。

クブスリーの町では奴隷を“禁止”はしていないが、奴隷の“持ち込み”を禁止しているため、今日、町で私が目にすることは無かった。

そもそも、王国が禁止していない中で、遠まわしな方法とはいえ奴

隷の禁止を実施しているこの町のギルドは大したものなのだ。

奴隷が発見された場合は、罰としてギルドが“没収”するらしいが、あくまで“奴隷だから”ではなく“奴隷を持ち込んだから”である所がミソで、奴隷本人は罰せられない。

また、禁止はしていないから、飼い主無しの拾得物扱いで、ギルドの保護下で、一定期間、労働に従事して解呪の費用を捻出すれば解放される。

奴隷商に対しては、確たる証拠がなければ「それは俺のじゃない」と云われたら罰金もとれないが、奴隷だけは取り上げることができるとし、その証言を契約書（誓約書）とすることで、解呪の儀式がスムーズに行える。茶番だな。

兎も角、奴隷商を“奴隷商であるから”罰すれば、王国の法と齟齬を生じ、敵も作る。とくに奴隷商は嫌われ者でありながら、金だけは持っていて裏にも顔が利く。

つまりは、そういうことのような。

「昨日までのスンと今のスンが、別人だと認識されているのは良い事なのですが、その所為で、余計な者に目を付けられたようです。風の旅団所属のBクラスのスンなら、あんなゴロツキは近寄ってこないのですが・・・」

「蹴散らすまで。この体はシュンだけのものだ。シュン以外には誰にも触れさせん！」

「はいはい、御馳走様」

豊かな胸を突き出し、凜々しく、男らしく宣言したスンだったが、アリスさんの言葉で思いつき惚気たことに気が付いて真っ赤になった。

が、スンさん。それは私が云うべき内容のセリフでは？

どちらにしても、これからはスンの身の回りに気を付けなければならない。

弱い異世界人の私がどうするのか？

あらあら・・・

私は確かに強くないし、寧ろ、弱い人間だろう。喧嘩も殆どしたことがない。

だけど、相手が倒すべき敵であるなら、そう認識したなら、私はどんな卑怯な手をおうと、相手を潰すだろう。いや、寧ろ進んで使おうだろう。

ほら、よく云うでしょ？おとなしい人ほど、キレると怖いって。

私は今までそこまでキレた事が無いのだが、多分、キレたら何でもやるだろう。

その場合、例えば、私自身は、土下座して小便を漏らし、涙を流しながら許しを請い、殺す価値もないと思わせるほど情けない姿を見せておいて、後ろから確実に猛毒を塗った武器で刺すとか？

・・・とにかく、思いつきり、”冷静にキレる”だろうな。それは断言できる。

正々堂々？何その可愛い生き物？

私の思考がちよっとだけ暗黒面に落ちていた。

だが、構わない。スンに危害を加える輩は、みんな、始末してしまえばいい。

取り敢えず、一人。スンを殺そうとした前の婚約者。

10年以上前のことだし、こちらから出向くつもりはないが、今後、余計な手出しをしてきたら容赦はしない。

・・・ピストルって何処で売ってるんだろう？

「どうしうたの？シユン。そんな怖い顔で・・・笑って？」

「は？・・・いえ、何でもありませんよ？」

私は怖い顔でクスクスと笑っていたらしい。

チャックさんが引いている。

まあ、なんだ。この世界にはあちら程の厳格な法はない。というか、私に云わせれば無法状態なのだが、今はそれがあるがたい。

そうか・・・私は、倫理ではなく、法に縛られていたと、そういうことなのか。

私のせいで妙な雰囲気になってしまった。

食後のコーヒー（らしきもの）をウェイトレスが運んできたところで、”それ”を受け取りながら、おもむろにダークさんが云った。

「こう云う時は、これが一番だ！」

陶器製のカップにはチキンラーメンが入っていた。

## 20 「非常事態は突然に」のようです。

今日は、私が異世界にやってきて三日目、の朝。

初日1月1日は、殆ど旅路。但し、スンとのうれしいはずかし”姫始め”をやり。

二日目1月2日は、スンを連れて町を散策しながら”羞恥プレイ”をやった。

うむ！基本、エッチな事しかしてない！

が、敢えて云おう！「満足である！」と。

今日も肌寒いが、風はなく、天気は良い。

宿の前にパーティーの馬車が停めてあり、チャックさんがこの町で買い込んだ食料などの荷物を積み込んでいく。

朝の挨拶をしてから私も自分の荷物を馬車に積み込み、他のメンバーを待つことにした。

グスタフさんは、武器屋に頼んでいた矢の受け取りに、ダークさんは昨日、魔獣から得た財宝の換金報酬を受け取った後、個人依頼を受けたことを報告し忘れたため、改めて、届け出に赴いている。

女性陣については、いわずもがな。

スンは昨夜から私が帰ることに愚図っている。

しかし、私は部屋を殆どそのままにして出てきている。正月三日だから、私が居なかったとしても、ご近所は誰も気にはしないが、流石に一度帰った方が良かったろう。

直ぐに来るから、といっても納得せず、むこうに恋人でもいるのではないかと勘繰ったスンは「前にも云ったけど、私はシュンを縛ったりしないよ？私は妾でいいの。その代わり・・・お願い・・・」と、その夜は、基本受身のスンが・・・ゲフンゲフン。

だめだめ・・・朝から工口に走るところだった。

思い出せ！私は「大人」だ。やりたい盛りの学生ではない・・・て、今更か？

兎に角、何とかスンを宥め、今朝の出発となった分けだが、何時でも向こうと行き来できるようにと、アリスさんから転移魔法とその練習方法だけでも教えて貰うことを約束させられた。

アリスさんによれば、転移魔法にも幾つかあり、魔法陣を使用して術者一人だけの転移は初級レベルで誰でもできるとのこと。難しいのは荷物や人数が増えた場合で、これは中級とは言えないが、かなりの魔力を消費するので使える者が限られる。

後は、距離。遠くへ転移しようとすればするほど、魔力を消費する。もつとも難しいのは魔法陣なしで転移することで、これは中級魔法に属し、単独の転移でもかなりの魔力を消費するため、敢えて使用する者はいないとか。

方法そのものは簡単で、魔法陣を思い浮かべて、そのイメージに体内魔力を流す。次に目的地をイメージして呪文を唱えるだけ。

この時、魔法陣の内部にあるものは目的に転移するのだが、魔法陣自体の大きさは大して問題にならないらしい。

まあ、私の場合は、魔力そのものが感知できていないので、要練習といったところ。

ちなみに、呪文は「彼の地に運べ。雷鳴の如く、風の如く。ムーブ」だった。

守護者なのにな？

車はね。エンジンと燃料タンクだけでは走れないの。

今の私は、膨大な燃料タンクと使い方の分からない大排気量エンジンを、別々に持っているだけで繋がってもいない。

スンは単独での転移魔法は使えるらしいが、パーティーとしての依

頼が数日後に受けてあり、私と一緒にあちらの世界に行くことはできないらしい。

まあ、私が役立たずでなければ彼らに付いて行くこともできるのだが、それはムリ。

この町で護衛を雇ってスン達が戻ってくるのを待つのも、費用的には可能だが、下手に他者と接触すれば、異世界人であることがバレる恐れがあるので、やっぱりムリ。

結局、当初の予定どおりに私は帰ることになった分けだが、例の部屋を常時開けておくことは約束させられた。（暖房費がバカにならないですが・・・）

これについては、話を聞いたダークさんも強く推奨していた。魂胆が見え見えですよ、ダークさん！？

そうこうしている間にダークさんと、グスタフさんが戻って来た。が、少し、浮かない顔をしている。

「パドとか云う村が、魔獣に襲われて消滅したらしいな」

「ええ。私も聞きました。『狂騒』ではないかと。しかし、その村の方々には申し訳ありませんが、パド村がセニエ領なら、一般人にこれ以上の被害はないでしょう」

ダークさんはギルドで、グスタフさんは武器屋で、それぞれ同じ情報を得ていた。

パド村はクブスリーの町から、中継地を二つ隔てたセニエ領の北にある村らしい。

セニエ領はロイド・フォン・セニエ侯爵の納める領地で、領内に『火災の迷宮』を抱えている。その迷宮が狂騒を起こしたのではないか？というのが専らの噂。

しかし、セニエ侯爵は賢明にも独自に騎士を城下町に集めており、



避難民の収容が既に始まっているらしいとのことだった。

「ギルドの待機命令はまだ出ていないのですね？」

「ああ、実際、狂騒が起きたとしても、セニエ領なら単独で撃退できるだろうし、それに、あそこの騎士団はつえエって噂だったしな」  
「確か、高位の冒険者と単独契約もしていましたね」

セニエ侯爵は、狂騒に備えて十分な備えをしていたらしい。

どっかの国の政治家のみなさんにも見習ってほしいものだ。元気の良い“やり手”と噂される若手の議員さんが「数百年に一度の洪水に備えるために、こんな堤防を作る必要なんてあるんですか？」なんて質問していたが・・・

私が気に入らないのは『質問』であることだ。今度どんな事が起きようと「質問しただけで不要とは云ってない」って答えようとしているのが見え見え。自分は責任とらないことを前提に質問しているのだから呆れる。

それに比べれば・・・

カカーン！カン・・・カカーン！カン・・・

突然、ギルドの建物のある方から、特徴的な金の音が聞こえてくる。道端を歩いていたらおじさんやお使い途中の少年が立ち止まり、不安そうな顔で振り返っている。

すぐに、宿の中からスンとアリスさんが飛び出してきて、同じようにギルドの方を眺める。

「悪いな、シュン。あれはギルドの“非常招集”ってやつだ。思ったより、やべえことになっちまってるらしい・・・」

何の事だか良く分からなかったが、かなり“拙い”事態になっている事だけは分かったので、私もみんなに付いてギルド前に同行した。ギルドの中に入りきれないからか、建物前に木箱が置かれ、その上に壮年の男が立っていた。

「よう、ギルドマスター！セニエだろ・・・『火炎の迷宮』の狂騒か？いくらだ？」

「救援要請の依頼か？いいぜ、俺達がいきやあ、楽勝だぜ！？」

群衆の中から幾人かの冒険者が、勇ましく景気のよい声を上げた。

「ああ、狂騒だ。セニエ領の『火炎の迷宮』・・・そして『業火の迷宮』二つ同時にだ。セニエの城塞都市が魔獣に包囲されたらしい」

## 21 練習が必要です。

ギルドマスターからの情報は、多くの冒険者の心を戦慄させたようだった。

さつきまで、威勢の良かった者たちも口を噤んだ。『業火の迷宮』はオーランド伯爵領にある迷宮で、地理的にはオーランド領の町より、セニエの城塞都市の方が距離的に近い。

二つの迷宮の同時狂騒。歴史的に無かった重大事件が、よりによって私がこの世界にいるときに起きた。

私達は一泊に帰ることになった。もう、風の旅団は私を護衛して「深奥の迷宮」に戻ることはできなくなったのだ。

ギルドマスターの依頼は「明後日正午までに各冒険者は装備を整えてギルド前に集合し、その場で部隊を編成して、随時、全面解放されたセニエ城塞都市の転移拠点に移す」というものだった。

幸い、セニエの城壁自体は持ち堪えているが、飛行タイプの魔獣に侵入を許している状況で、被害は時間と共に増加しているらしい。

「そういう分けて、シュンさんには此处で待っていてほしいのです」

グスタフさんが申し訳なさそうに云った。

冒険者は幾つもの特権があるが、それらは国やギルドの緊急事態には協力する義務を負うからなのだそうです。まあ、特権を既得権と勘違いするような阿呆よりはましかな？

で、私が参加しないでいい理由は、ランクがFだから。召集の対象はDランクまでで、要するに足手まといのEやFランクを連れていく余裕は無いということ。

納得です。

「魔獣が溢れるって、具体的にはどう云う状態になるんですか？」

取り敢えず、私のことはどうでもいい。多くの人の命が掛っているらしいし、自分で云うのもなんだが、私はこう云う場合は、ジタバタしない性格のようなのだ。寧ろ、極端に冷静になる。

だが、私は参加できないが、Bランクのスンは行かなければならない。

みんなもだ。

「そうですね、迷宮中の魔獣が地表に出てきた拳句、周辺の魔獣を巻き込んで暴走する、と云えばいいでしょうか？兎に角、大魔獣数匹を中心に中級魔獣や下級魔獣まで、一つの迷宮の魔獣全てが出てきて、人を襲います。数は・・・2000～3000でしょうか・

・・・」

「それが、今回は二か所で同時に起き、しかも一つの都市を襲っている。セニエは準備していたらしいが、二つ同時とは考えていなかった筈だ。飛行タイプの魔獣もいるそうだから、かなり酷い状態だろうな」

グスタフさんとスンの話を纏めると・・・

本来は狂騒が起きると、騎士団を中心に攻撃し、足の速い先頭集団を撃破しながら城塞都市まで後退。その頃には下級魔獣はかなり数を減らしている筈なので、予備兵力の豊富な城壁付近まで引つ張ってきて、余裕を持って、中級・大魔獣を仕留める。

どこの都市でも概ねこのような方法が取られるのだが、今回は、二か所から侵攻されたため、出撃した騎士団が、まず大打撃を受けてしまい。城塞都市周辺までかなりの数の魔獣に侵入されてしまった。

幸い、セニエ侯爵が単独契約を結んでいた高位の冒険者たちを中心

に、城壁付近で、一応、撃退に成功したが、殲滅には及ばず、城壁外周を徘徊している状況で、しかも、飛行タイプの魔獣まで手が回らず、防衛側を含め都市内部に被害が出ている。

私は下級魔獣はブレードラビットしか知らないが、それでも、あんなのに包囲されたら高位の冒険者でも、安心して戦えないだろう。小さくても殺傷力を持つ魔獣なのだから。

そして、それらを先に片付けるにしても、城壁の上に不用意に姿を晒せば、飛行タイプの魔獣が寄ってきて攻撃を受ける。

これを何とかするには、対空戦闘能力の高い魔術師や弓使いを大量に城壁に上げて、数で圧倒するしかないのだが、想定より倍以上に膨れ上がった魔獣のために、数が足りない。

そこで、セニエ侯爵は緊急依頼をギルドに提出したということのようだ。

もちろん、都市内部に侵入した魔獣を討伐するために、剣士や重戦士などにも必要だ。

「心配しないでください。みなさんのお帰りをお待ちしています」

話を聞き終えた私には、そう云うしかなかった。冷静に見て私に今できることは無い。

最強が聞いて呆れる。

風の旅団は、今朝、深奥の迷宮に赴くための用意を終えていたから、必要な武器や食料が既に揃っていた。だから、私の様な素人に説明してくれているが、他の冒険者たちは今頃、物資を求めて街中を走り回っているだろう。

「本当に・・・すまないと思う」

ピクツ！どつかで聞いたようなセリフ・・・  
今のスンのセリフは・・・お茶らけている場合じゃあないし、自重  
しようか。

改めて契約して、元の部屋に戻った私は、それでも何かできないか  
考えた。何処までできるかわからない身体能力か？習ってもいない  
魔法か？

そう考えると、冒険者のスキルの高さに改めて驚かされる。考えて  
みれば、彼らは魔獣の種類ごとに、武器や手段を変えて効果的に倒  
しているのだ。魔法だけでも駄目、身体能力だけでも駄目なのだ。

なら、戦いでない部分でならどうだろうか？

私がアリスさんに教えて貰った魔法は、転移魔術。まだ、出来ない  
が！？

でも、一応、まともに教えて貰ったのはこれだけだし、できるよう  
になればギルドで物資輸送の手伝いくらいできるかもしれない。

練習しよう・・・もしかしたらその物資がスンを救うことだってあ  
るかもしれない。

「シュン、考えることか？」

いつの間にか、スンが部屋に戻ってきていた。

ロビー兼食堂での話し合いの後、風の旅団としての話し合いがあつ  
て、スンは当然に参加したため、私とは別々になっていた。

「いや・・・ちょっとアリスさんに相談があつただけど・・・」

残念ながら、アリスさんは高位の魔術師としてギルドに呼ばれてい  
ないそうだ。アリスさんのランクはCなのだが、それ以外の職種と  
違って、体内魔素の保有量が物を云う魔術師にランクはあまり意味

が無いそうだ。

できれば、アリスさんにもう一度よく聞いておきたかったが・・・

「アリスになの相談だ？私では駄目なのか？」

あれ？なんでしょうか？今、私の微S心を猛烈に刺激したものは・・・？

ううむ、スンには、過去の事情からトラウマがあるようだ。実際、例のことがあって以後“他の男に抱かれたことはない”と必死に訴えていた。気にしないのに。

「スンじゃ、だめ」

## 22 やってみようです。

まあ、なんというか、この後、スンを言葉攻めでいじめ倒して、泣かせた上で、エッチな要求をする妄想が脳裏をよぎったわけだが、“今は”止めておいた。

分別をわきまえた大人に、俺はなる！！！！

「転移魔法のやり方を教えて貰おうとおもってね」

何処かホツとしたようなスンに先程までの考えを話すと、それ位なら自分が教えられると云い始めた。何でも、スンはアリスさんから転移魔法を習ったらしい。

それに、最初の一步である体内魔力のコントロールは、スンの方がうまいくらいだとか。

と云うことで、部屋の中で練習を開始。

座禅の要領で精神を集中して、体内魔力を感じる・・・だめ！  
もう一回・・・やっぱり、だめ！

なんか違うような気がする。スンによると意識を集中してお腹の辺りにある（様な気がする）魔力の塊に触れ、そこから魔力を腕や足に伸ばしていく。

転移魔法の場合は、それを足先から魔法陣に伸ばし、体外魔法を取り込みながら魔法陣全体を満たすと魔法が起動し、次に目的地をイメージすると転移するらしい。

しかし、私にはどんなに頑張ってみてもそんな魔力の塊は認識できないのだ。

結局、二時間程、スンが付き合ってくれて、体内魔力の認識さえ出来ずに終わってしまった。初めてなのだから、焦ることは無いとス



ンは云ってくれたが、実は、結構、凹んだ。  
一応、神竜で守護者らしいから、もうちょっとこう、なんとかならんもんですかいね？

「まあ、明日にでも、もう一度やってみれば良いだろう・・・ね？」

スンはそう云って部屋の備え付けのお風呂に向かった。

今、“ね”って云った。間違いなく云った。

ちよつと落ち込んでいたけど、これは聞き逃さないよ？

でもね、ちよつと待ってて欲しい。そして、私は携帯電話を取り出して、例の番号に電話を掛けた。

「夜分、誠に恐れ入りますが、神様はいらっしゃいますでしょうか？あ、神様ですか？いつもお世話になっております。村上俊です。お忙しいところ恐縮なんですが、ちよつとお伺いしたいことがございまして・・・はい、ええ、ええ、そうなんです・・・」

まさに、“神頼み”を実際にやってみた。

で、神様によると“そりゃ、無理じゃわい”の一言だった。私に魔術が使えないということではなく、人間とは使い方が多少、異なるのだとか。

そもそも、神竜が魔法陣なんか書けるか？と云われてみればそのとおり。

魔法陣は、人間が魔法を使えるように長い年月を掛けて、工夫に工夫を重ねて、比較的魔力が少ない者でも効率よく使えるようにしたもの。

神竜には必要がなく、寧ろ、邪魔にしかない。

「しかし、ですね、神様？私、自分の魔力も全く感じないんです」

「お主の体は見た目はともかく神竜で、頭の手から爪の手まで魔力

で満たされておるのじゃから、そこから“特定の魔力を”などと、無理な相談じゃな。いってみれば、水の中で水を探すようなもんじやで。まあ、後は、自分で何とかせい」

と云うことで、神様とのお話しが終わった私は、改めて、精神を集中し転移魔法をためして・・・みたりはしないよ？

急いで服を脱いで、スンの待つお風呂へ向かいました。

それから私はスンの白くてスベスベの体をゴシゴシ（布とか束子とかは断固として使用を拒否する！）しながら考えた。

魔力に問題が無いのなら、次は魔力の放出さえできれば魔法陣は起動するのだから、後はイメージの問題か???

などと考えたところで、考えるのを止めた。

昔々、それこそ、小学校低学年位の時のこと。

超能力が欲しいかった私は、スプーンを曲げようとしてみたり、時計の針を止めようとしてみたり、いろいろやってみた。

でも、出来る筈もなく、アホな私は“きつと、集中力が足りないんだ！”とか、いろいろ考えた分け。でだ、トイレでウンコしている時に一番集中していることに気が付いて、私の超能力研究は終わりを迎えたわけだ。

ん？意味がわからんと？

ウンコするときに、もし、レポートとかできちゃったら？

まあ、ウンコしながらじゃないと超能力が使えないのなら、無くても同じかなあ、とそこは何故か合理的に、そして、すんなりと諦めたと云うお話し。

考えてみれば、妙に、冷めた子供だったのだな。

そんなわけで、現在、ここで、転移魔術なんぞ発動したら、うれし

い以前に、恥ずかしすぎる。まして、転移魔術は、今の私にとっては“マジもの”なのだから。

転移魔術のことは明日考えよう。

朝になってから、みんなはギルドでの打ち合わせのために、早くから宿を出た。

出発は明日だが、それ以前に調整しなければならないことが山ほどあった。

まして、風の旅団は有名な冒険者パーティーで、派遣される者たちの中でも高位に位置する。自然と中心的役割を担わなければならないかった。

その日、少し疲れた様子でスンが帰って来たのは、もう日付が変わる頃で、私は、ただ、スンをベッドに運び、静かに寝かせてやることしかできなかった。

そして、出発の日の朝、いつも通り朝食をとり、身支度を整えた風の旅団は、厳しい顔つきで宿を立った。

私は見送りのため、彼らと共に、以前、スンと行った公園に向かった。

公園には、スンと座ったベンチはなく、ただ広い空間があるだけで、その中央には大きな転移魔法陣が設置されていた。

その魔法陣の脇に小さなテーブルが置かれ、私の冒険者登録をしてくれたねこ耳受付嬢が真剣な面持ちで、書類を捲り、一つ一つの名前を確認しながら読み上げていった。

そして、魔術師らしき数人の男たちが呪文を唱え、転移魔法陣が輝くと同時に、その中に立っていた20人程の冒険者たちが、次々にセ二エの城塞都市に転移して消えてく。

「次、風の旅団。鉄壁のダーク以下5名。お願いします！」

名前を呼ばれたみんなは魔法陣に向かい。スンは私と繋いでいた手を離れた。

「シヨウ。じゃあ、行ってくる」

「ああ。みんな、どうか無事で！」

手を振って見送ると、ダークさんはニヤリと笑い、グスタフさんは微笑んで頷き、アリスさんはフンと云い、チャックさんはへへへと笑い、スンは、ちよつと恥ずかしそうに笑って手をふってくれた。

「目標はセニ工城塞都市3番魔法陣です。転移開始！」

## 23 無双するようです。

風の旅団が、他の冒険者とともに転移して姿を消した後も、私は30分程の間、公園で次々と送り出される冒険者たちを見送っていた。周りに集まっていた町の人たちも声援を送っていたから、なんとなく、同じ気持ちになれたような気がしていた。しかし、それから間もなく・・・

「なんだ！？魔法陣が・・・誰か転移してくるぞ?!」

「なんだと？誰か非難してくるのかもしれん。さがれ！」

ざわめきの中、転移してきたのは二人の騎士のようだった。

かつては白銀に輝いていたであろう甲冑は、薄汚れ、あちこちにへこみを作っている。酷い怪我を負っているのか、一人は穂先の折れた槍に体を預け、一人は魔法陣の中で倒れ伏していた。

「怪我人だ！・・・治療術師を呼べ!!!!」

「出血が酷い。急げ！」

ここに設置された魔法陣は特殊なもので、現在は、セニエ城塞都市内にある複数の転移魔法陣とクブスリーの往還のみができるようになっていた。つまり、彼らは間違いなくセニエからの帰還者なのだが、伝令にしては様子がおかしかった。

「だ・・・応援を・・・では・・・めだ・・・」

「何を云っている！救援の部隊ならたった今送ったぞ！もう大丈夫だッ」

すると、両腕を抱えられていた騎士が、驚きに息を止め、絶望した

ように叫んだ。

「応援を・・・送っては駄目・・・だ！今朝・・・セ二工の城壁は・・・中央広場の全開・・・魔法陣が・・・魔獣に・・・。今、・・・すれば、魔獣どものド真ん中に・・・転移することに・・・」

私は、息を飲んで見つめる群衆のなかから跳び出していた。目の前が真っ暗になった。

ついさっきまで、笑顔だったみんなの、スンの笑顔が、脳裏に蘇ってくる。

そしてそれは、直ぐに、見たこともない、残酷な想像に切り替わる。私は、だれかの制止を振り切って、魔法陣に跳び込むと一気に転移していた。

昨日まで、いや、ついさっきまで出来なかった転移を、私は単独で無詠唱で行って、次の瞬間にはセ二工城塞都市の転移魔法陣に立っていた。

第3魔法陣は、何かで赤く塗装された中央広場にあった。

そこは、見たこともない魔獣たちが我が物顔で闊歩し、人を食らっている地獄だった。

だが、私の転移には気が付かなかったのか、魔獣たちは直ぐにはやっつてこなかった。

「どこだ！スン！みんなあ！」

魔獣たちに気付かれるのも構わず、私は大声で叫んだ。

どこからか、かすかに檄剣の音が聞こえ、それに倍する悲鳴がそこから中から聞こえる。

まるで、ゴミのように転がる遺体の数々の中に、風の旅団の姿は無かったが、スンと同じ組で転移した見覚えのある男たちの顔があっ

た。

「どこだあああああああ！！！！」

一瞬の後、私はスンを見つけていた。

中央広場の片隅で、未だ戦い続けている一団がある。

巨大な魔獣が数匹、その一団に必要な突進し、或いは、炎を吹き付け、そして、隙を見せた男が一人、弾き飛ばされて、固い石畳に叩きつけら“グシャリ”と音を立てた。

そして、その男の直ぐ脇に、倒れ伏すスンの姿があった。

ブォンンンン・・・

次の瞬間、私は、ピクリとも動かないスンを抱き上げていた。

スンの顔は苦痛に歪み、顔色は蒼白になっていた。

当り前だ。右腕の肘から先が千切れかかっていた。

先程の男と同じように地面に叩きつけられたのだろうか、意識もない。

「スン？スン？しっかりしてくれ・・・」

私は、無意識に、腰に提げたショートソードを引き抜き、自分の左腕に当てると一気に引き裂いた。流れ出る血をスンの唇に押し当て、無理やり飲ませる。

ゴクリ。とスンの喉が動いたのを確認して安心すると、私はショートソードを投げ捨て、自分のシャツを引き裂いてスンの腕に巻き、千切れかけている腕を固定した。

ドスツドスツ！、ドスツドスツ！

スンを抱える私の後ろから、何か大きな物が近づいてくるのがわかった。

「シュン！スンを連れて逃げろッ！」

何処かで、聞いたことのあるような声が聞こえたが、私は逃げなかった。

頭の中に云いようなない、ドロドロとした怒りがあった。どいつがやった？誰がスンを傷つけた？

「おまえかああああ！？」

左手を無造作に振った瞬間。“パンツ”と音がして近づいてきていた何の頭が消し飛んだ。

首から上を失った魔獣が血しぶきを上げ、地響きを当てる倒れ伏す。私はその返り血からスンを守るようにコートを広げ、スンを包み込むようにして両手で抱き上げた。

しぎややややや！

前に深奥の迷宮で見たのと同じ魔獣だ。こいつには打撃や斬撃は通用しない。だが・・・

「おまえかああああ！？」

ゴスっつっつっ！！！

私に齧り付こうとするその頭の頭を、構わず下から蹴り上げた。前足が宙に浮き、そして、そのまま落ちてきた所を足で思いつき踏みつけると、その頭の頭は“パクンッ”と音を立ててザクロのよ



うに割れ、血を飛び散らせて動かなくなった。

美しい公園の石畳に放射線状のヒビが走り、地面が僅かに陥没したが、まあ、いいさ。

でも・・・まだ、足りない・・・

その時、私の前に黒く巨大で禍々しい殺意を持った“何か”が現れた。

体長は5〜6メートル、最初に殺った魔獣よりは小さいが、遥かに強大な魔力を持った四足の“何か”・・・

「あれは・・・まさか、モラニスのブラックサーベル・・・凶王！  
！！」

## 23 無双するようです。(後書き)

おお、無双を描くと、文字数が減るなあ

## 24 おとなしい人が怒ると怖いようです。

その魔獣は虎に似ていた。

ただ、全身が闇のように黒く、たてがみのように首のまわりを覆うのは、どれも鋭い刃で、これに触れたものを細切れにするのだろう。その半面、漆黒の胴体はそれだけで、名剣の斬撃をも弾き返し、その下の鋼鉄の筋肉から生まれるパワーは他の大魔獣を凌駕するのだろう。

太い四肢にある20センチ程も突き出た爪は、騎士の持つ盾をあつさり引き裂く力を持ち、その牙にかかれば、城門の扉さえ噛み砕かれるのだろう。

それがどうした・・・

私にはどうでも良い事だ。私の遣るべきことは・・・遣りたいことは決まっている。

スンを傷つけたものを・・・すり潰す！！

実際、スンを傷つけたのが凶王であるかどうかは分からないが、それもどうでもいい事だった。此処にいる全部の魔獣を殺せば済む話だから・・・

凶王と呼ばれたそれが、獲物と認識した私に向かって一瞬で襲いかかった時、私もまた、凶王に襲いかかっていた。

「私は、あなたの獲物じゃありません。あなたが！私の獲物なんですよ！！！」

ブオオオオオン！

そして、私はいつの間にか凶王の側面に立ち、その横腹を蹴り上げていた。ガスっ！という音と共に、凶王が真横にズレた。だが、四肢の爪で地面を掴み、踏み止まって見せ、そして、私に向かって、大きく開けた口から炎を吹き付けてきた。頑丈な体だ。

それはかつて、アリスさんが見せた炎の中級魔法に匹敵する火力を見せた。

ブオオオオオン！

「何処を向いてるんです？私はこっちですよ」

私は、また、同じように凶王の側面に移動し、横腹を蹴りつける。何度も、何度も・・・何度も、何度も・・・

今私が使っている魔法は、転移魔術ではない。実際、スンやアリスさんに教えられた魔術の使用法など、何一つ踏襲していないのだから。

無論、身体強化魔術のアクセルでもない。そんなものを使ったら抱きかかえたスンに負担がかかってしまう。

私はただ、あそこに行きたい、次はここ、とそう思っているだけ。まるで、息をするように、呼吸するように、自然に転移を繰り返している。

そうか・・・これは、転移といよりは、いつそ、テレポート？・・・なら・・・

少し冷静になってきた私は、昔読んだ小説の主人公が使っていた戦い方を真似てみることにした。凶王は、頑健な体で私の蹴りに堪えている、といより、まるで痛みを感じていないかのようにふるまっている。

正直、面倒くさくなってきた。だから、さっさと片付けよう、まだ、沢山いるのだから。

ブオンンンン！パシッ！ブオンンンン！

次の瞬間、私は凶王の後方に立っていた。

それまでと違う動きに凶王は、咄嗟に振り向こうとして地面に倒れた。

「あ、できた。これは・・・何というか・・・チートってやつですか」

グギヤアアアア、ゴギヤアアアアア！

振り返ると凶王は、地面をのたうち回っていた。

それは痛いだろう。さっきまで大地をしっかりと掴んでいた、強靱な前足が一本。無くなっているのだから。

私のしたことは、ごく簡単。一瞬で凶王の前に転移して凶王の前足に蹴りを入れ、それと同時に、その触れた部分と一緒に転移したのだ。

私の足元に、凶王の左前脚が転がっていた。

「ちょっと五月蠅いですよ？もう結構ですから・・・死んでください」

ビクッ！

凶王の目に、初めて怯えが走った。

もっとも、その目は、既に切断され地面に転がった首にあって、光を失っていたが・・・

「・・・シュン・・・シュン？」

小さな声が直ぐ近くで私を呼んだ。

「だめ・・・よ・・・シュンは、そんな・・・目をしては・・・だめ・・・なの」

私の腕の中で、スンが薄く眼を開けていた。

慌ててスンを下すと、スンは動かない筈の右手を挙げて私の頬に当たった。

「スン！もう大丈夫だよ、今、みんなの所に・・・」

「あな・・・たの・・・目が・・・好き・・・優しい・・・暖かい・・・」

「シュン！スンは無事か！？クソツタレがあああ！！！」

「シュン！スンをこっちに！直ぐに治療術を・・・」

私のそばに風の旅団のみんなが集まっていた。グスタフさんはその大盾でスンを隠し、アリスはさんはその陰でスンに治療術を施した。私が大魔獣を三体片付けたことで、戦力的に余裕が出来たのだろう。公園の各所で冒険者たちが攻勢に出ていた。

「かかってこいやあああ！」

チャックさんも健在らしい。

見れば、厳しい表情のグスタフさんが、一度に三本の矢をつがえて上空に向けて打ち放っていた。

「野郎ども、押し返せ！転移魔法陣を確保するんだあ！」

ダークさんのどなり声が公園中に響き渡る。

そして、第3転移魔法陣が輝き、その中から盾を全方位に巡らせ、槍を立てた30名程の騎士たちが現れると、冒険者たちの勢いは更に加速した。転移魔法陣が魔獣に占拠されているのを承知の上で、決死の覚悟で転移してきたことが窺える陣容だった。

「我々は、王国騎士団である。魔獣はどこだ！」

セニエ侯爵領を襲った“二重狂騒”が、終息を始めた瞬間だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3792y/>

---

押し入れの異世界

2011年11月23日12時20分発行